

# 内容解説資料



特設ウェブサイト  
もご覧ください

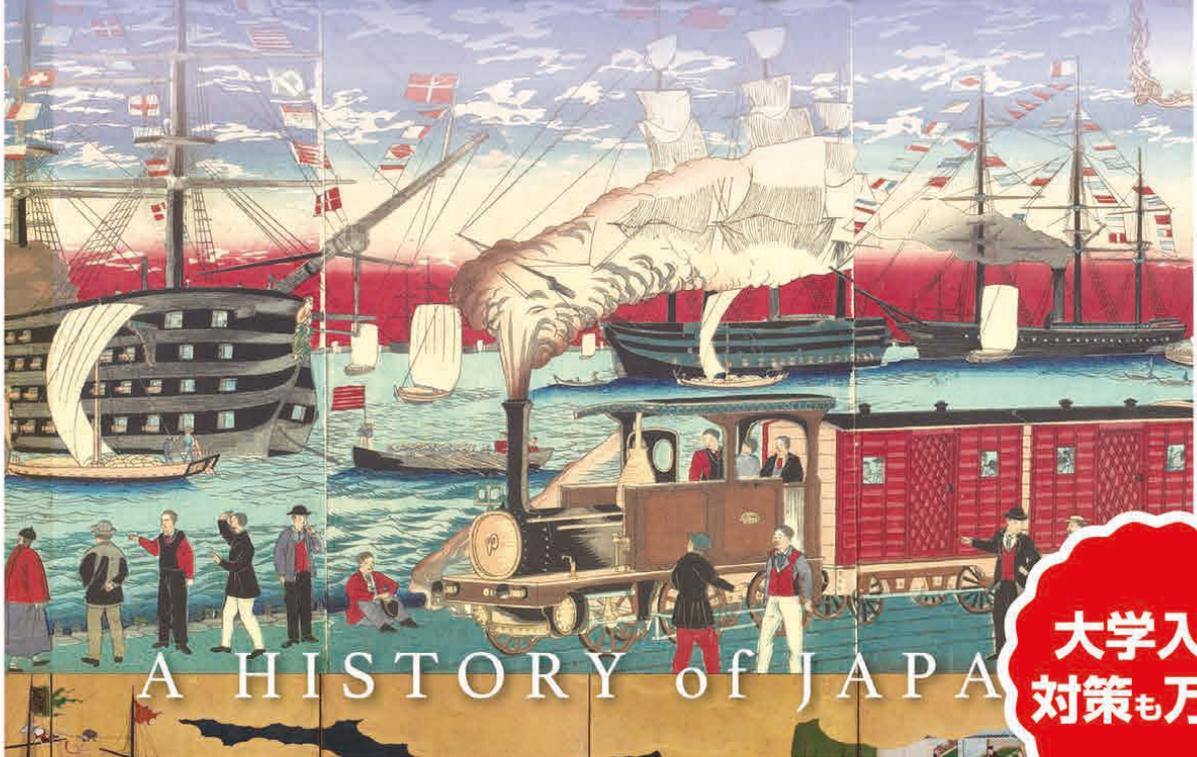
日探046-901『新詳日本史探究』

「教科書発行者行動規範」に則った資料です

新規発刊!

新詳

# 日本史探究



A HISTORY of JAPAN

大学入試  
対策も万全!

歴史の流れと背景をとらえ、  
探究する力を育てる教科書

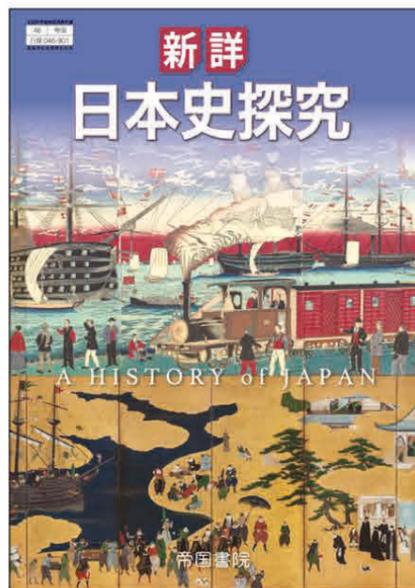
# 新詳日本史探究

令和9(2027)年度発刊  
日探046-901  
B5判 400ページ

大学入試対策も万全!

歴史の流れと背景をとらえ、  
探究する力を育てる教科書

令和9(2027)年度  
新規発刊!



## 『新詳日本史探究』に込めた思い

著作者代表 長崎大学 教授 木村直樹  
帝国書院 編集部

現在、社会は急速に大きく変わろうとしています。人工知能(AI)に代表される科学技術の発展や海外との交流の広がり、私たちの生き方に大きな影響を与えるようになり、共生社会のあり方や感染症への対応など、向き合うべき課題も複雑さを増しています。こうした時代だからこそ、日本列島の歴史を探究し、自分たちの社会の成り立ちや先人たちの課題への取り組みを深く理解することが必要であり、そこから未来を考える確かな手がかりを見つめられると私たちは考えています。

日本列島の歴史は、国内だけで完結したものでも、また為政者たちだけが形づくってきたものでもありません。本書は、そうした広い視点から日本史をとらえられるよう構成しました。日本史を「世界とのつながりのなかでとらえる歴史」として位置づけ、日本の社会や文化が世界との接触のなかで形づくられる姿や、日本から世界へも影響を与える姿を丹念に描きました。さらに、庶民の歩みや、これまで見えづらかった人々の歩みにも丁寧に光をあて、人権・ジェンダーなどの課題も取り上げて、多面的・多角的に歴史を描きました。

また、本書にはさまざまな資料を掲載し、それらの読解を通して考えを深められるように構成しました。生徒が問いと仮説を表現しながら探究し、みずから未来を開く力を育てる教科書としています。

歴史を学ぶことは、過去を知るだけでなく、みずからの立ち位置を確かめ、人間の失敗と成功から学び、時に失われてしまった価値観や考え方に気づくことでもあります。それを積み重ね、歴史的思考をもって未来に向き合うことが、21世紀に立ちほだかる諸課題を乗り越えるための、よりよい選択を重ねる力となっていくはず。本書が、そうした学びの一助となれば幸いです。

## 本資料のもくじ

全体構成 ..... 4

**特色①** **世界の動きを背景に、日本史の学びが広がる教科書** ..... 6

- 世界の視点から見ることで、日本の歴史がわかる本文記述 ..... 8
- 日本と世界の相互関係をとらえる「世界の中の日本」 ..... 10

**特色②** **因果関係を丁寧に記した理解しやすい教科書**

- 社会的な背景を丁寧に記した本文記述 ..... 12
- 歴史研究の成果も踏まえ、流れが理解できる本文記述 ..... 14

**特色③** **日本史を多面的・多角的にとらえられる教科書**

- さまざまな視点から日本史を描く本文記述と「深める」 ..... 16
- 日本各地の歴史に焦点を当てる「地域の歩み」 ..... 18
- 日本史の通説をとらえ直す「歴史再考!」 ..... 19
- 文化と社会背景を結びつける「文化から見る当時の社会」 ..... 20

**特色④** **紙面の三段構成と多数の資料で分かりやすく使いやすい教科書**

- 日本史のポイントがつかみやすい要約文・本文・側注の三段構成 ..... 22
- 広い紙面を生かした多数の掲載資料と、資料読解に取り組める工夫 ..... 24
- 歴史事象を空間的にとらえられる帝国書院ならではの地図 ..... 25

**特色⑤** **探究活動に丁寧に取り組める教科書**

- 部全体で探究活動に取り組める構造 ..... 26
- 中学校の歴史や歴史総合を踏まえて部の学習に臨める「時代の扉」 ..... 27
- 資料を通して思考力・判断力・表現力を養う「探究TRY」 ..... 28
- 部全体の学習を振り返り、時代の特色をまとめる「まとめと展望」 ..... 30

入試対応 ..... 32

QRコンテンツ ..... 34

関連教材 ..... 38

特色一覧・  
著作関係者一覧 ..... 41

本文執筆者紹介 ..... 42

帝国書院の  
歴史教科書 ..... 44

特色①

特色②

特色③

特色④

特色⑤

入試対応

QRコンテンツ

関連教材

本文執筆者

# 全体構成

# 時代の転換がわかる全体構成

- すべての部で、1章は時代の転換期を扱い、2章はテーマごとに資料を探究し、3章は転換期以降の通史を学ぶ構成としています。
- 各部での時代の特色が明確になるよう、1章で取り扱う転換期の範囲を工夫しています。各時代で何が変化したのかをとらえやすい教科書です。

## 探究活動を行いやすい各部の構成

●本書は、学習指導要領で求められる「時代を通観する問いの表現」や「時代の特色についての仮説の表現」といった活動を行いやすいよう、以下のように各部の構成を工夫しています。詳しくは、本資料p.26をご覧ください。



## 1部(先史・古代)

先史時代から10世紀ごろまでを扱う部です。日本が東アジア諸国から受けた影響や、国家が形成されていく流れについて、丁寧に記述しています。1章では、時代の転換期として、一定のまとまりをもつ小国連合の邪馬台国が形成される3世紀末までを扱います。

## もくじ

東アジアと日本の交流の歴史	巻頭 1
はじめに	巻頭 3
歴史総合の振り返り	1
もくじ	2
コラム・特設・QRコンテンツ	4

### 1部 先史・古代の日本と東アジア

時代の扉	6
1章 先史時代の社会の形成	8
1項 日本列島への人類の進出	8
2項 豊かな狩猟採集社会の形成	10
3項 農耕社会の成立と小国家の形成	14

### 2章 歴史資料と先史・古代の展望

探究TRY①	遺跡の分布や遺物から時代区分について考える	20
探究TRY②	考古資料と文献資料から東アジアとのつながりを考える	22
探究TRY③	日記や文学から当時の人々の考え方や暮らしを考える	24

### 3章 古代社会の形成と変容

1節 律令国家の形成と展開	
1項 ヤマト王権と古墳	26
2項 飛鳥の朝廷	32
3項 律令国家の形成と白鳳文化	36
4項 平城京と律令国家の展開	44
2節 律令国家の転換と貴族文化	
1項 平安遷都と唐風文化	54
2項 摂関政治の展開と社会の変容	59
3項 国風文化	64

### 1部 まとめと展望

### 2部 中世の日本と世界

時代の扉	72
1章 中世社会への転換	
1項 院政の成立と荘園の拡大	74
2項 武士の政治進出と平氏政権	78
3項 院政期の文化	82

### 2章 歴史資料と中世の展望

探究TRY①	中尊寺金色堂から東アジアの交流を考える	84
探究TRY②	絵図から土地の権利について考える	86

### 探究TRY③

文学作品から中世の社会を考える 88

### 3章 中世社会の展開と変容

1節 武家政権の発展と安定	
1項 鎌倉幕府の成立	90
2項 北条氏による政治	95
3項 鎌倉文化と鎌倉新仏教	100
2節 東アジアの動向と武家政権の変容	
1項 モンゴル襲来と社会の変容	106
2項 朝廷の分立と室町幕府	111
3項 東アジアの国際秩序と倭寇	116
3節 武家支配の拡大と経済活動の活発化	
1項 室町時代の社会の変容と経済活動	120
2項 室町文化	126
3項 戦国大名と分国	132

### 2部 まとめと展望

### 3部 近世の日本と世界

時代の扉	138
1章 近世社会への転換	
1項 東アジアの変動と南蛮貿易	140
2項 信長・秀吉による統一政策の推進	143
3項 全国統一と近世社会への変化	147
4項 桃山文化	150

### 2章 歴史資料と近世の展望

探究TRY①	江戸城から幕府と大名の関係を考える	154
探究TRY②	琉球王国から近世の対外関係を考える	156
探究TRY③	女性の旅日記から近世の社会を考える	158

### 3章 近世社会の展開と変容

1節 幕藩体制の確立	
1項 幕藩体制の形成	160
2項 近世日本の対外関係	165
3項 身分制と人々の暮らし	171
2節 幕藩体制の安定化と社会の発展	
1項 幕藩体制の安定化	175
2項 近世社会の発展	178
3項 元禄文化	184
3節 幕藩体制の動揺と社会の成熟	
1項 支配制度の再整備	188
2項 幕藩体制の立て直し	194
3項 近世後期の文化	198
4項 国内外の問題と幕府の対応	204

### 3部 まとめと展望

### 4部 近現代の地域・日本と世界

#### 時代の扉①

1項 日本の開国と経済の混乱	212
2項 江戸幕府の滅亡	218
3項 新たな政治体制の発足	221

#### 2章 歴史資料と近現代の展望

探究TRY①	アイヌ民族から近現代日本の国づくりを考える	224
探究TRY②	アホウドリから近現代社会の課題を考える	226
探究TRY③	ひげから近現代日本の世相を考える	228

#### 3章 近現代社会の展開と変容

1節 新政府による国づくり	
1項 制度の刷新と殖産興業	230
2項 「文明開化」の社会と人々	234
3項 対外関係の再編成と国境画定	239
4項 士族の政府批判と反乱	242
2節 立憲政治の成立と日清戦争	
1項 立憲国家を目指す運動	244
2項 内閣制度創設と憲法制定	247
3項 日清戦争と国内外の変容	254
3節 資本主義の確立と日露戦争	
1項 日本の産業革命と資本主義	260
2項 日露戦争と帝国化する日本	266
3項 日露戦争後の国内情勢	271
4項 明治時代の文化	274

#### 4節 両大戦期期の日本

1項 第一次世界大戦と日本	278
2項 政党政治の展開と大衆化	282
3項 新しい国際秩序と日本	292
5節 第二次世界大戦と日本	
1項 満洲事変と政党政治の崩壊	298
2項 日中戦争と戦時体制	302
3項 第二次世界大戦の展開	307

#### 時代の扉②

6節 占領と日本の復興	
1項 占領と民主化への道	320
2項 冷戦と日本の経済復興	328
3項 国際社会への復帰	334
7節 経済大国日本への道	
1項 高度経済成長期の日本	340
2項 世界経済の変化と日本の台頭	350
3項 アジア諸国の変動と日本	358

#### 時代の扉③

8節 グローバル化による変化と日本の課題	
1項 国際秩序の変化と日本	361
2項 21世紀の日本と課題	365
4部 まとめと展望	368
4章 現代の日本の課題の探究	
歴史探究の方法	370
① 社会や集団と個人	372
② 世界の中の日本	374
③ 伝統や文化の継承と創造	376

年表	378
さくいん	386
歴史総合頻出用語	巻末 1
歴史の舞台と世界文化遺産	巻末 2
行政区分	巻末 3

#### ●本書の構成

この教科書は、時代ごとの4部構成になっています。1章では、時代の転換に着目して時代の特色について考察し、そこから「探究する問い」を表現します。2章「探究TRY」では、1章で表現した「探究する問い」を踏まえて、自身の興味・関心に関連するさまざまな資料を活用して、その時代の特色について自身の仮説を表現します。3章では、「探究する問い」と自身が表現した仮説に基づいて学習の課題(問い)を設定し、「探究する問い」と自身の仮説について答えます。4部4章では、教科書の学習を踏まえて、自身のテーマを設定して、資料を活用して探究し、自身の考えを表現します。

#### ●表記の注意

①国名の表記  
叙述の便宜上、国名を慣用に従い、次のように記す場合がある。(アメリカ合衆国は原則として、アメリカと表記している。)  
米…アメリカ 英…イギリス 伊…イタリア 蘭…オランダ 独…ドイツ 仏…フランス 露…ロシア ソ…ソ連 韓国…大韓民国 北朝鮮…朝鮮民主主義人民共和国 など

②年代の表記  
太陽暦を採用する前の暦(明治6年1月1日より前)と現在の暦では、年や月にずれが生じるが、この教科書では、原則として元号の年はそのまま西暦に置き換え、( )内に元号を示した。月については、昔の暦のままとした。

③地名の表記  
地名は、原則として、現地表現に近づけて表記している。慣例で表記されてきた用語は、教科書の初出で併記するようにしている。ただし、中国地名は日本語での表記や慣例での表記を優先している。

④人名の表記  
人名は、原則として、日本語で表記している。慣例で表記された用語は、教科書の初出で併記するようにしている。ただし、朝鮮の人物は第二次世界大戦までは日本語での表記を優先し、その後は現地のよび方にしている。

## 3部(近世)

16世紀半ばごろから、19世紀半ばごろまでを扱う部です。幕府が出した各政策の背景や、近世日本が海外から受けた影響を、丁寧に記述しています。1章では、時代の転換期として、江戸幕府が開かれ、武家諸法度や禁教令を發布するころまでを扱います。

## 4部(近現代)

19世紀半ばごろから現代までを扱う部です。日本が世界の影響を受けながら近代化・大衆化・グローバル化に向かう姿や、国際秩序の変化にともなう日本の動向など、日本と世界が影響し合う姿を丁寧に記述しています。1章では、時代の転換期として、廃藩置県などによる新政府の基盤確立と岩倉使節団の派遣までを扱います。

- 本書は、日本史の流れを大切にしつつ、日本と世界の交流や相互に与えた影響が見えるように工夫しています。
- 生徒がこれまで学んできた日本史の理解が、世界の視点を取り入れることでさらに広がる教科書です。

入試に直結!

大学入試で増加傾向にある、日本と世界の関係史を問う問題に強くなります。共通テストの大問1「歴史総合」への対応力も身につきます。

古代の本文記述・コラム・特設の例

▼p.44-45

本文で、日本史の理解が深まる

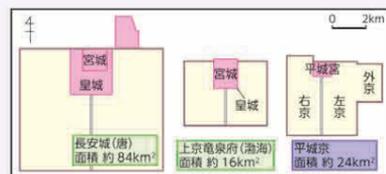
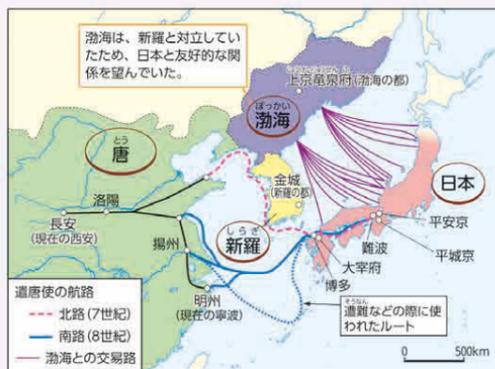
本文は全時代を通して、世界とのつながりのなかで日本の歴史が形成されていく様子を、丁寧に記述しています。(▶本資料p.8-9)

本ページでは、日本が中国の情報・知識を取り入れて平城京の整備を進めていったことがわかります。

コラムで、日本史を見る視点が広がる

世界が日本に与えた影響や、日本が世界に与えた影響に関するコラムを随所に掲載しています。(▶本資料p.11)

本ページのコラムでは、則天武後の政策と日本の動きのつながりがわかります。



唐・渤海・日本の都城の比較
遣唐使の航路 7世紀は、北路を使用した...

4項 平城京と律令国家の展開

則天武后が与えた影響
聖武朝の国分寺・国分尼寺の建立は、則天武后期における、仏教優先政策の一つである...

遣唐使の派遣
外交と文化の直接摂取を目的として約30年ぶりに派遣した遣唐使は、新しい情報や知識をもち帰った。710年に、この知見を基にして造営された平城京に遷都した。

平城京
平城京は唐の長安を模した形態で、条坊制で区画された都市であった。唐を手本にして貨幣「和同開珎」を発行し、蓄銭叙位令を出すなど流通に努めた。



和同開珎 皇朝十二銭の最初のもの。村上天皇(→p.60)の時の乾元大宝が最後。(鳥取県福寿出土・東京国立博物館蔵)

地図で、日本と世界の位置とつながりが分かる

各所に、日本と周辺世界を広く描いた地図や、世界地図を掲載しています。(▶本資料p.25) 本図では、7~9世紀ごろの世界全体や、各地をつなぐ陸海の交易路をとらえることができ、日本が唐を介して西アジアやヨーロッパまでつながっていたことがわかります。



世界の国際都市長安と日本の留学生・留学僧

国際都市長安とシルクロード
唐の中央よりやや北西に位置する長安は、さまざまな国や地域との結節点となっていた。長安より西に延びる道はシルクロード(絹の道)とよばれ、遠くヨーロッパ地域からも人々が訪れ、さまざまな文物が運ばれてきた。

返りとして与えられる回賜品をすべて書籍に替えて持ち帰った(『旧唐書』倭国日本伝)と唐の人々に評価されているように、長安に集まる最先端の文化を積極的に貪欲に吸収しようと努めた。そのなかで、717(養老元)年派遣の遣唐使で、阿倍仲麻呂や玄昉らと共に留学生として唐に渡った吉備真備がいる。

特設で、日本史を見る視野が広がる

世界と日本の相互関係が特に深い時期には、特設を設置しています。(▶本資料p.10) 本ページでは、唐の長安が国際都市であったことや、日本の留学生がどのような活動をしていたかなど、本文記述の背景や具体例となる事柄がわかります。

世界の視点から見ることで、日本の歴史がわかる本文記述

本文では、全時代を通して、日本と世界のつながりを丁寧に記述しています。

中世の本文記述の例

p.116-117



近世の本文記述の例

p.140-141



近現代の本文記述の例

p.346-347



p.348



p.116-117 14-15世紀の倭寇と東アジア

日本が南北朝の動乱のただ中にあった14世紀後半は、東アジア全体にとっても変動の時期であった。漢人の王朝である明が台頭し、元に代わり中国を統一し、朝鮮半島でも高麗が滅亡して朝鮮王朝が建国された。この時期に朝鮮半島や中国大陸の人々を悩ませたのが倭寇である。倭寇は米や住民の略奪といった海賊行為を行う一方、交易に従事する商人としての側面ももっていた。14世紀から15世紀にかけて活動した倭寇(前期倭寇)の主な構成員は対馬、岩崎、松浦地方の人々だが、朝鮮の人々も含まれていたとされる。中国の人々を中心とする16世紀の倭寇(後期倭寇)には、薩摩、大隅、肥前などの人々も加わっていた。

国内の人々が倭寇と結びつくことをおそれた明は、自国の民が私的に海外に出ることを禁じた(海禁政策)。こうして明は外国貿易を統制し、諸国の王が朝貢のために明に派遣した使節に貿易を許可する形をとった。

朝鮮は日本から来た人々に貿易を許可することで、彼らが倭寇となって海賊行為を働くのを防ごうとした。そのため足利将軍だけではなく、守護大名や国人、商人などが朝鮮との貿易を求めて使者を派遣した。これらさまざまな勢力が個別に貿易を展開した点が日朝貿易の特徴である。

POINT 1

倭寇が単純な海賊ではないことや、前期・後期での違いが示され、倭寇についての理解が深まります。また倭寇への対処について、明や朝鮮の考えが示され、日本と明・朝鮮が相互に影響しあって東アジアの国際秩序が形成されたことがわかります。

p.140-141 16世紀後半の東アジア海域の変化

16世紀半ば、日本は世界屈指の銀産出・輸出国となり、輸出された銀の多くは、経済が発展し、銀の需要が高まった中国へと向かった。この時期には、明への朝貢関係を中心とした交易や外交のしくみが動揺していた。海禁政策を続ける明では、国内の経済発展や北方で対峙する遊牧民との戦費調達のため、銀の需要が高まった。また、アジアやヨーロッパでは、中国産の絹製品や陶磁器、生糸の需要が高まった。そのため後期倭寇が、東アジアや東南アジア各所で、明の物品と海外の銀とを交換する密貿易を盛んに行った。明は、沿岸部で密貿易や海賊を働く後期倭寇の取り締まりに苦慮し、1570年ごろに海禁を緩めた。しかし、日本との貿易は制限されたままで、倭寇やアジアに進出したポルトガルなどが日本と明の貿易を担った。

そして同時期に日本では、石見銀山をはじめ鉱山が相次いで開発され、銀を鉱石から抽出する技術(灰吹法)が朝鮮より導入された。こうして膨大な量の日本銀が産出され、それらが中国に向かった。日本へは、当時国内生産がほとんどない生糸や木綿などが持ち込まれた。木綿は、戦国時代の日本において、兵士の服として需要が大きかった。鉱山開発は膨大な人と資金を必要とし、それを調達できた戦国大名が力をつけていった。

POINT 2

明の銀需要の高まりが後期倭寇の密貿易を引き起こし、その結果として明の海禁政策の解除につながったことがわかります。また、日本銀による交易を背景に、資金力の有無が戦国大名の国力に直結するようになっていったことがわかります。

p.346-348 高度経済成長期の日本と世界

大衆化が進むにつれ、マスメディアも発達し、大きな影響力をもつようになった。映画では黒澤明など世界的な評価を受ける監督が現れ、ハリウッド映画へ影響を与えた。1953年にはテレビ放送が始まり、59年の皇太子(現 上皇)の結婚パレードを機に普及し、ラジオや映画に替わる娯楽となった。

1970年代には「an・an」や「non-no」といった雑誌が海外の生活様式を紹介し、若者を中心に広く読まれ、その影響で女性の国内旅行が増えた。1964年の海外渡航の自由化以降は海外旅行も増えた。漫画も日本の特色ある文化として発展していった。手塚治虫や長谷川町子など人気漫画家の作品が、テレビアニメ化され、多くの人々に愛好された。芸術分野では、芸術家の岡本太郎や草間彌生らが世界的に評価された。

1964(昭和39)年に東京オリンピックが開かれた。日本の経済発展を世界にアピールする場でもあったため、オリンピック開会式に合わせ、首都高速の開通など各地の高速道路網が整備された。東海道新幹線も開通し、インフラの整備が進んだ。

POINT 3

高度経済成長期になると、日本人が海外の文化に触れる機会が増えるとともに、日本の文化が世界にも広がるようになっていったことがわかります。また、東京オリンピックの開催を背景に、日本国内のインフラ整備が進んでいったことがわかります。

その他の世界とのつながりを重視した箇所の要約とポイント(例)

Table with 2 columns: ページ (Page) and 記述の要約とポイント (Summary and Points). Rows include: p.26-31 ヤマト王権の拡大, p.106-107 モンゴル襲来, p.204-205 19世紀前半の欧米船来航, p.256-258 日清戦争.

●随所に、特設ページとコラムの「世界の中の日本」を設置しています。日本と世界の相互関係を、さまざまな観点から描き、日本史を見る視野を広げます。

特設ページ「世界の中の日本」

日本と世界がどのようにつながっていたのかを、政治や文化などのさまざまな視点から示す特設ページです。

コラム「世界の中の日本」

特設ページと同様のコンセプトのコラムを、本文に関連させる形で随所に掲載しています。(全55か所)

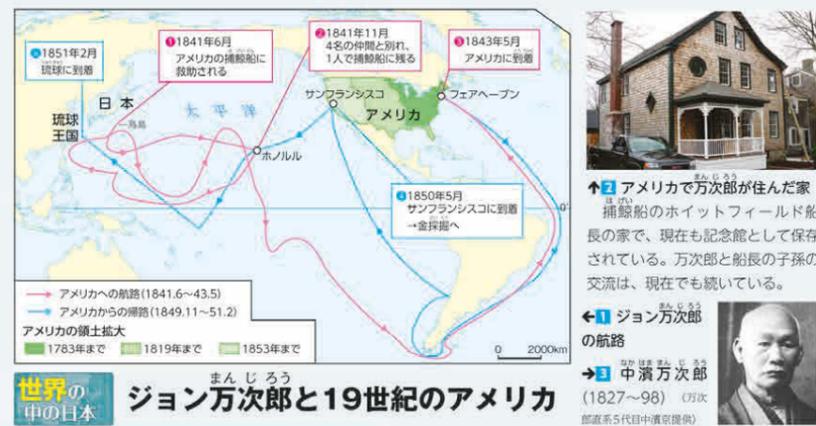
POINT 1

ジョン万次郎に焦点を当てながら、当時のアメリカが太平洋、ひいては日本に進出していった経緯を描いており、日本の歴史が世界の動きと連動していることがわかります。

POINT 2

帰国後のジョン万次郎が、土佐藩で講義を行ったり、幕臣として日米修好通商条約の批准使節に加わったりするなど、世界での学びを生かして日本の歴史に影響を与えたことがわかります。

p.217



世界の「中」の日本 ジョン万次郎と19世紀のアメリカ

●ジョン万次郎の漂流とアメリカでの生活

1841年、土佐の漁師万次郎(14歳)は鯨漁の最中に嵐で遭難した。漂流した万次郎ら5人は伊豆諸島最南端の無人島である鳥島に漂着し、約半年後に、日本近海で捕鯨を行っていたアメリカ船に救助された。ハワイのホノルルに向かい、万次郎以外は下船したが、万次郎はそのまま捕鯨船で働くことを希望した。船上で簡単な英語を学んだ万次郎は、ジョン・マンとよばれるようになった。その後、捕鯨船の船長に伴われてアメリカ東海岸に渡り、そこで学校に通い、数学・航海術・測量術などを学んだ。

●アメリカの西部開拓と太平洋への進出

このころのアメリカは、急激な発展を続けている時期であった。イギリスからの独立直後は大陸東岸だけが国土だったが、1803年のフランスからのルイジアナ購入、45年のテキサス併合、48年のメキシコとの戦争によるカリフォルニア獲得など、西へ国土を拡張し続けた。国土拡張は「明白な天命」であるとする信念の下、大陸中部・西部の開拓が進められ、先住民は土地を奪われ、移住を強いられた。48年にカリフォルニアで金鉱が発見されるとゴールドラッシュが始まり、多くの人々がサンフランシスコなど太平洋沿岸へと移住した。

太平洋に到達したアメリカは、さらに西の太平洋へ関心をもった。清との貿易のため、従来の喜望峯・インド洋経由の航路に代わり、北太平洋を横断する蒸気船航路の開設を意図した。この航路は途中

で石炭補給の必要があり、日本が適切と判断された。さらに太平洋で捕鯨船が難破した際に安全に保護されるためにも、日本を開国させる必要があった。

1851年にオランダから新水給与令を通知された西洋諸国は、日本への使節派遣を計画した。一方、この時期のヨーロッパ諸国は、1848年からのウィーン体制崩壊をめぐる動乱や、53年からのクリミア戦争など、西欧周辺の出来事に注力していた。こうした背景から、アメリカが日本開国・開港の主導権を握っていった。

●万次郎の帰国と日本での活躍

捕鯨船の船員として生活していた万次郎は、カリフォルニアでのゴールドラッシュに加わり、金採掘で資金をためた。その後ホノルルで、漂流したときの仲間と合流し、上海行きの船を經由して、1851年に琉球へ到着した。薩摩藩や幕府の取り調べを受け、2年後に土佐へ帰国を果たした。

帰国後は、土佐藩で武士に取り立てられ、中濱万次郎と名乗った。藩校の教員となり、坂本龍馬や後藤象二郎・岩崎弥太郎に講義を行った。さらにペリー来航直前には、幕府に招聘されて幕臣となり、江戸で英語や航海術の教育を行い、日本初の英会話本の作成も行った。1857年には江戸の軍艦操練所の教授となり、1860年には日米修好通商条約の批准書交換の使節団に加わり、咸臨丸でアメリカに渡った。明治維新後も開成学校(現 東京大学)に勤務したり、ヨーロッパへ派遣されたりするなど活躍した。

Table with 2 columns: ページ (Page) and テーマ (全5か所) (Theme (all 5 cases)).

World's Japan column: 戦闘形態を変化させた馬の導入. Includes text about horse domestication and images of horse skulls.

p.31「戦闘形態を変化させた馬の導入」

World's Japan column: 懐良親王と明. Includes text about diplomatic relations between Japan and Ming.

p.117「懐良親王と明」

World's Japan column: 蝦夷地から清へ至る昆布ロード. Includes text about sea routes and an image of a seaweed dish.

p.183「蝦夷地から清へ至る昆布ロード」

POINT 3

p.249の本文では、大日本帝国憲法の制定とその内容について記述しています。同ページの本コラムでは、立憲体制の樹立を世界的な視点からとらえ、各国の反応や対応を学ぶことで、明治時代の日本が非西洋諸国から注目を集めていたことがわかります。

World's Japan column: 非西洋諸国における立憲体制の樹立. Includes text about constitutionalism in non-Western countries and an image of a group of men.

p.249「非西洋諸国における立憲体制の樹立」

World's Japan column: 戦時中のアメリカ移民. Includes text about immigration to the US during wartime.

p.311「戦時中のアメリカ移民」

3部3章2節2項「近世社会の発展」の一部

p.178-179



中世末から明治時代末までの日本列島における人口の変化



近世初頭から明治時代初頭までの日本列島における耕地面積の変化



瀬戸内海沿岸の干拓予定図(17世紀後半) 岡山藩は、瀬戸内海沿岸を干拓し、大規模な新田を開発した。

疑問 なぜ、17世紀に、人口と耕地面積が大きく増加しているのだろうか。

2項 近世社会の発展

項の課題 人口の増加と諸産業の発展は、江戸時代の社会にどのような影響をもたらしたのだろうか。

POINT 1 17世紀に入ると気候が安定し、平和な世になったことから、人口が増加して開墾や新田開発が活発化したことがわかります。

POINT 2 権力者の意識が戦争ではなく領地開発に向かい、多くの人員の動員や戦争で培われた技術によって開発が後押しされたことがわかります。

POINT 3 大名は格式の向上や収入増加のため、農民も生産力向上のために、開発に熱心であったことがわかります。

POINT 4 食料生産の増大の結果、都市人口も増大していくという因果関係がわかります。

1 榑海 榑海は東西12km・南北6kmにわたる巨大な湖で、現在の千葉県旭市・匝路市・東庄町にまたがる位置にあった。千和田湖や浜名湖より一回り小さいが、面積は現在の東京の山手線内側に匹敵する。

地域の 利根川のつけ替え改修工事 江戸幕府は、17世紀前半から中頃までの30年余りをかけて、東京湾に流れ込んでいた利根川本流の流れを変え、下総の銚子で太平洋へ流れ込むように大規模な工事を行った。これにより、江戸の水害は減少した。また、利根川が東北・北関東と江戸周辺の交通の大動脈として機能するようになり、その流域の新田開発も進んだ。



平和がもたらした人口と耕地の増加 17世紀半ば以降、人口と耕地面積は急速に増加していった。平和な時代に大きな権力が存在したことによって、大規模な耕地の開発が可能となった。

17世紀前半の小水期を過ぎると、戦乱のない世の中において、人口は急激に増加していった。17世紀初頭から18世紀初頭までの100年で、日本列島の人口は約2倍になった。そして、人口の増加に対応して、開墾や新田開発が活発化した。

この背景には、藩や幕府が、政治の方向性を戦争ではなく領地の開発に向け、また中世と比較して権力が強いので多くの人員を動員でき、大きな河川の改修や広範囲な干拓など大規模な開発が可能となったことがある。また、戦国時代に向上した築城や鉱山の土木技術は、治水や灌漑技術に応用され、開発を後押しした。大規模開発には、2万石余りの田畑を創出した下総の榑海の干拓工事や、洪水対策と年貢など物資輸送のため河川流通の整備を兼ねた利根川のつけ替え改修工事などがある。

大名の格式は石高で示されるため、大名たちは格式向上のためにも、自分の領地の生産力の強化や河川の整備に熱心であった。また、17世紀後半以降、幕府の財源の一つであった金銀鉱山からの収入が減少し、年貢など農業収入が中心となっていたため、幕府にとっても耕地面積の拡大は重要であった。百姓たち自身も、小規模経営が増えたことから、生産力向上のため積極的に開墾を行った。さらに、17世紀末からは、幕府や藩が民間の力を利用し、商人などに開発を請け負わせた町人請負新田も開かれるようになっていった。

都市に住む武士や町人の食料は、百姓の食料生産によって賄われていた。そのため、耕地面積の拡大によって食料生産が増えることで、都市

史記「農業全書」 第一巻 第一 耕作 其稻かぶくさらすしてかき故、冬中くさらかきをき、春耕せば、牛のちから不入して整やすし。...

第六巻 第一 木綿 木綿は、百年以前其たねを伝へ来たりて今普く広まれば、作る法委しからざれば突りあしき物なるゆへ其事詳かに何れの農書にもしるしをけり。先種子をえらぶ事専らなり。...



百姓の作業風景 脱穀と選別は、短期間に集中的な労働力が必要な作業であった。従来は臨時に女性を雇っていたが、農具の工夫・改良により、人を雇う必要はなくなっていった。

全10巻で、穀物・野菜・果樹などの栽培法や、動物の飼育法が記されている。

に供給される食料も増え、結果として都市人口の増大につながった。

農業の発展 単婚小家族型の家が17世紀の終わりにかけて大多数を占めるようになると、人々は集約型の農業を行うことによって生産性を高めていった。

百姓は、単婚小家族型の小規模経営が中心となり、少人数・小面積で生産力を高めるための農具開発が進んだ。牛馬を使わずとも田畑を深くすき返せる、備中鍬が普及した。さらに家単位の労働力で運用できる脱穀用の千歯扱、ももとそれ以外を分別する唐箕や千石碓なども考案された。また肥料は、山野から集めた草木を使った中世以来の刈敷以外に、人糞尿を安全に発酵させた下肥、干鰯や油粕などの購入肥料(金肥)が用いられ、生産力向上につながった。自分の田畑に水を流すため、灌漑用の踏車や竜骨車も利用された。百姓は、生産性を高めるため農業技術書も読んだ。17世紀末に宮崎安貞が記した『農業全書』は全国に普及し、幕末まで高い売れ行きを保った。



千石碓 「万石通し」ともいう。斜めになったふるいを利用して、米粒の大きさを分けたり、米とぬかを分離したりした。

食料生産の増大とともに都市人口が増えると、商業・貨幣経済も発展した。百姓は、経済に対応して金銭を得るために、商品作物の生産を拡大していった。庶民の衣服に使われる木綿のための綿花栽培、高級衣料に使われる生糸のための養蚕と桑栽培、嗜好品のたばこ・茶などの栽培が広がった。また、人々の需要に応じて、夜の明かりに用いる油のため菜種や、紙をつくるための楮の栽培も盛んになった。さらに、布を染めるため羽根の紅花や阿波の藍玉など地域の特産品も登場した。民衆が家に畳を敷くことも増え、い草なども生産された。

生糸や木綿は、従来は主に輸入品であった。しかし、17世紀後半以降、金銀産出量の減少に対応して幕府は貿易額を制限し、それにより輸入品が減少したことから、各地で急速に国産化が進められた。18世紀後半からは、幕府の主導で朝鮮人参・砂糖などの国産化も進んでいった。

庶民の衣服の変化 中世までの庶民は、苧麻とよばれる麻布を通常着用していた。

商品作物 米穀などの食料以外で、地域外の市場で売却するための作物。幕府は当初禁止していたが、経済の発展や、大名たちが米以外の産物を換金する必要があることから栽培が認められるようになった。四木(漆・茶・楮・桑)三草(麻・紅花・藍)が代表的商品作物となる。木綿の衣服の広がり(→p.185)に対応して染色のための紅花・藍が広く栽培されたように、人々の生活の変化に対応して、さまざまな作物が各地で栽培された。

入試に直結! 共通テストや、多くの大学が出題する論述問題など、歴史の流れを理解しているかが問われる問題への対応力が身につきます。

POINT 5 多くを占めた小規模経営の百姓は、生産力を高めるために、農具の開発や金肥・農書の活用を積極的に進めたことがわかります。

POINT 6 食料生産の増大→都市人口の増大→貨幣経済の発展→商品作物の生産が拡大、という因果関係がわかります。

POINT 7 幕府の貿易制限を背景に、生糸や木綿などの輸入作物の国産化が進められたことがわかります。

- 各部の1章では、時代が転換していく流れを、背景や理由とともに丁寧に記述しています。
- また、全時代を通して、最新の研究成果も反映しています。

2部1章1項「院政の成立と荘園の拡大」  
2部1章2項「武士の政治進出と平氏政権」の例

▼ p.74-75



▼ p.76-77



▼ p.78-79



▼ p.80-81



院政の開始と自力救済社会への転換

1068(治暦4)年、関白の藤原頼通に冷遇されてきた後三條天皇が即位し、宇多天皇以来170年ぶりに藤原氏を外戚としない天皇となった。

次いで白河天皇は、1086(応徳3)年に堀河天皇に譲位し、その後に鳥羽天皇が年少で即位すると、みづからは上皇(院)として政治の実権を握った。これにより、天皇家の家長(治天の君)である上皇が、子や孫である幼少の天皇を後見しながら、それまでの法や慣習にとらわれずに政治を行う院政が始まった。院政はその後、鳥羽上皇、後白河上皇、後鳥羽上皇へと継承され、江戸時代まで断続的に続いた。

11世紀になると気候が温暖化して、地方豪族や大名田堵、任地に土着した国司の子孫のなかに大規模な開発をする者が現れた。開発された土地は富を生み出す財産であり、所有する土地の権利や境界などをめぐってしきりに紛争が起こるようになった。中世になると、土地の私的所有を前提に、自力によって紛争を解決しようとする社会がしだいに形成されていった。彼らは、国衙に認められて臨時雑役を免除され、近隣の農民を支配して、後に開発領主とよばれるようになった。

POINT 1

上皇による政治が、それまでの政治とどのように異なっていたのかがわかります。また、中世への転換として、土地をめぐる争いを端緒に自力救済社会に移り変わっていったことがわかります。

荘園公領制への転換

さらに、上皇はそれまでモザイク状に展開していた開発私領を中心にその周囲の土地を広く囲い込んだ荘園の設立(立荘)を認めるようになった。こうして、耕地のみならず集落や山野河海を含んだ領域型荘園が成立し、急速に拡大していった。領域型荘園は、境界が明確に定められ、その内部の空間を荘園領主が支配することができた。立荘を行えた上皇の下には大量の荘園が集まり、鳥羽上皇の皇女八条院に与えられた八条院領や後白河上皇が自身の持仏堂に寄進した長講堂領など、荘園はその後の院政を支える経済的基盤となった。

私的な土地所有が公的に認められた荘園と、公的な土地が私領化した国衙領(公領)とは、荘園整理と立荘により明確に区別されるようになった。こうした荘園と国衙領からなる土地制度を荘園公領制という。荘園・公領では、ともに主要な耕地は名に編成され、名主が名田の管理を任された。名主は、下人(隷属農民)や作人(名田をもたない農民)などに耕作させ、名田ごとに年貢・公事・夫役を納めた。荘園公領制はしだいに変質しながら、戦国時代まで続く土地制度となった。

POINT 2

中世への転換として、古代の荘園から中世の荘園公領制への変化や、その流れが戦国時代まで続いていくことがわかります。荘園については、最新の研究成果となる「立荘」や「領域型荘園」を取り入れて記述しています。

源平の台頭と武士が時代を動かす世への転換

源氏や平氏といった軍事貴族たちは、天皇家に連なる血筋のよさと京都における縁故を利用して、任国となった地方で力を蓄えていった。また、彼らは院や摂関家に登用されるようになり、京都と地方を往還しながら武士団を率いて中央政界に進出していった。このような軍事貴族を京武者とよぶ。

清和天皇を祖先とする清和源氏は、10世紀ごろから畿内に本拠を構えて、摂関家に仕える中級貴族となった。

源氏が君主であった摂関家の弱体化と一族の内紛によって勢力をやや衰えさせたのに対して、平正盛の子の平忠盛は、瀬戸内海の高橋平定などで鳥羽上皇の信頼を得た。

1156(保元元年)年、鳥羽上皇が死去すると、代わって院政を行おうとした崇徳上皇とその弟の後白河天皇との間で政治の主導権をめぐる争いが起こった。

両者は合戦となり、天皇方が上皇方を攻撃してこれを破った(保元の乱)。天皇・摂関家内部の主流争いが、京都で武士たちの合戦によって決着したことは、貴族社会に衝撃を与えた。

POINT 3

源氏と平氏といった軍事貴族の台頭や、平氏の地位向上について、背景と流れがわかります。また、中世への転換として、武士の合戦が中央の政治に大きな影響を及ぼすようになったことがわかります。

武家政権のはじまりと私貿易の継続

平治の乱後、清盛は、後白河上皇への奉仕と武力によって異例の昇進を遂げた。

平氏の経済的基盤には、数多くの知行国と500に上る荘園があった。また、宋との貿易に関与することで大きな利益を得た。さらに、代々の受領や知行国として関係の深い畿内・西国の武士たちを家人として従え、荘園や公領の地頭に任命した。

平氏政権は、各地で成長した武士団をみづからの指揮下に組織し、武力を基盤とした最初の政権でありながら、京都の六波羅に居宅を構え、摂関政治によく似た貴族的性格が強かった。加えて朝廷内の権力の独占は、院の権力を圧倒して反発を招いた。当初は協調関係にあった後白河上皇ともしだいに対立するようになり、反対勢力の結集を促すことにつながった。

遣唐使の停止によって国としての貿易がなくなった後も、大陸からの貿易船の来航は続いていた。11世紀後半以降、日本と宋・高麗との間で民間商船の往来が活発になり、私貿易が行われていた。12世紀に宋が北方の女真人の建てた金に圧迫されて南宋となつてから、貿易を重視した南宋との通商が一層盛んに行われるようになった。

POINT 4

中世への転換として、平氏政権が、貴族的な性格をもちつつも最初の武家政権として成立したことがわかります。一方対外関係では、10世紀と同様に私貿易が継続していたことがわかります。

# 日本史を多面的・多角的にとらえら

## ▶ さまざまな視点から日本史を描く本文記述と

- 本文や、特設・コラムの「深める」にて、民衆からみた歴史や人権・ジェンダーの課題など、中央の政治史だけでないさまざまな視点から歴史を記述しています。
- 歴史を探究して現代に生かすための視点や考え方を学べる教科書です。

本文記述と  
コラム「深める」

人権・ジェンダーの課題、アイヌ民族、琉球王国、環境問題など、さまざまな視点から歴史を記述しています。(コラム全66か所)

### POINT 1

民衆の差別意識が朱子学の広まりとともに定着したことがわかります。また、差別された人々の生活や立場についても具体的にわかります。

### POINT 2

近世の「家」が近世社会で生きるために重要なしくみであったことや、「家」の存続のために婿養子を迎えるなどさまざまな手立てがとられていたことがわかります。

### POINT 3

当コラムでは、近世の「家」のうち、女性の立場についてさらに具体的に理解できます。このように、「深める」コラム・特設のうち、現代社会を考えるために特に重要な「人権・ジェンダー」と「環境・防災」に関する箇所には、アイコンを付して分かりやすくしています。

▶ p.174

年	主な出来事
1767	江戸で、旗本に仕える滝沢家に生まれる
76	父との死別・兄との離別などで家縁を継ぐ
80	主君の下から出奔、その後主君を養育
92	伊藤(→p.186)や医師などを学ぶ
92	萬屋重三郎(→p.199)に買込まれる
96	その節改名して武士の名と身分を放棄
96	文筆執筆に専念し、初めて読本を刊行
1814	「南総里見八犬伝」(→p.202)の刊行開始
36	蔵書売却などで資金をつくり、孫を御家人の養子とする(実質的な武士身分継承)
39	失明、息子の縁 路の筆記で口述執筆始める
42	「南総里見八犬伝」最終巻を刊行
48	82歳(歿年)にて死去

**歴史再考!** 江戸時代の身分は定まったものだったのか

身分制が厳格だと社会が硬直するため、17世紀末頃から一部で身分の移動がみられた。北方探検で活躍した蘭学林蔵(→p.197)が、学識があり算術に優れていたことを認められ、百姓から幕臣になったように、武士に登用される者がいた。裕福な百姓・町人などが、困窮した武士の家に持参金を払って名目上養子となり、身分を変えることもあった。作家として成功した曲亭馬琴(→p.202)は、孫を武家の養子とした。また、学問を修め医師や宗教者となることも、身分を超越する手段であった。その他、百姓が下級武士や宗教者の仕事も行い、1人で二つの名前と身分を使い分けることもあった。下級武士として働く場合、勤務時間のみ借字と帯刀が許され、勤務中は他者から武士として扱われた。

→曲亭馬琴の生涯

**考えよう** 身分はどの程度定まっていたのか、あなたの考えを述べてみよう。

**「家」における女性の立場** (人権・ジェンダー)

近世の女性は、家庭や寺子屋で学ぶ「女大学」(→p.158)などの書物を通じて、女性は結婚するまで父に、結婚後は夫に、夫の死後は子供に従うべきだという「三従」の心得を学んだ。

一方で大坂の商家では、「息子は選べないが婿は選べる」という言葉に象徴されるように、女子が優秀な婿養子を迎えて家業を繁栄させることが望ましいと考えられた。このように、女性が実質的に財産の継承者である事例もある。

**近世の「家」社会**

近世社会の人々は、家に属することで社会的に存在することができた。家長の権限は強まりつつも、家の存続のために養子なども盛んであった。

近世社会に存在したさまざまな集団は、個人の集合体ではなく、多くの「家」によって構成されていた。17世紀半ば、社会が安定すると、百姓や町人も含めて社会全体で家の枠組みが安定していった。

● 家の単位が、構成員である各人の、家屋・土地・墓地などの財産、職業を維持するための道具の保持を含めた技能の継承を保障していた。そのため家の存続は、人々が社会的に生きるために重要であった。家長の男性やそれを継ぐ予定の長男の権限は強くなっていき、一方で女性は公式に家を継承することができなさとされ、下の立場に置かれた。

家において、血縁関係は必ずしも重要ではなく、存続のために婿養子や次の世代に他家から夫婦ごと養子にするなどの方策もとられた。近世後半になると、これは身分を越える手段ともなっていた。

**1節の振り返り**

江戸幕府は、全国の支配体制をどのように整備したのだろうか。あなたの考えを説明しよう。また、あなたが2章で表現した「近世の特色の仮説」も再確認しよう。

174 中学校との関連 差別された人々、「家」

# れる教科書

## 「深める」

入試に  
直結!

テーマ史の問題への対応力が身につきます。特に、アイヌ民族・琉球王国・女性史は近年頻出のテーマです。また、多面的・多角的な視点を身につけることで、論述問題において深みのある解答が可能になります。

特設  
「深める」

本文とは異なる視点から歴史を描き、日本史の理解を多面的・多角的に深められる特設です。



▶ p.170

### POINT 4

近世のアイヌ民族や琉球王国の人々が、独自の信仰・文化をもっていたことがわかります。また、それぞれが日本や周辺世界とどのように影響しあっていたのかがわかります。

▼ p.169



**琉球王国の文化と周辺世界**

● 琉球王国の信仰

日本とは別の国であった琉球王国では独自の信仰が発達した。沖繩の人々は海の神にニライカナイという世界があり、そこからやって来る神によって村落到座儀もたらされたと信じていた。村落の祭にはノロとよばれる女性がつかさどった。これらは沖繩県内だけでなく、鹿児島県の奄美群島でも確認される。奄美群島は、薩摩藩の島津氏の侵襲を受けるまで、琉球王国の支配下にあつたためである。

● 琉球王国の文字・言葉・歌

琉球の人々は独自の文字はもたず、漢字やひらがなを用いた。琉球王国の公文書や碑文、歌謡集の「おもろさうし」をみると、ひらがながよく使われていたことがわかる。琉球の言葉(琉球語)を表記するにひらがなが便利だったようである。その一方で、16世紀後半に琉球が島津氏に使者を派遣した際、日本出身の人物が通訳として同行していた。当時の琉球の人々と日本人々々との間の言葉の壁は、高かったようである。

● 日本・中国の影響を受ける琉球文化

1609(慶長14)年に薩摩藩の支配下に入った琉球ではさまざまな変化がみられた。17世紀後半には家言(系図)が編纂され、家譜をもつ士族とともない百姓という身分の区別が明確になった。士族と百姓では衣服やかんざしに差があったほか、住宅の広さや屋根に瓦を用いてよいかなども違いがみられた。

ページ	テーマ(全10か所)
p.53	古代の病気が障がいのある人への施策
p.69	暦は誰のためのものか
p.169	琉球王国の文化と周辺世界
p.170	アイヌ民族の文化と周辺世界
p.238	岩倉使節団と同行女子留学生の学び
p.253	近代家族規範と天皇家
p.284	北海道と沖繩の民族としての自覚
p.297	日本人移民 ~広島県を例に
p.315	沖繩戦
p.317	国際新秩序と米ソ対立

# 日本史を多面的・多角的にとらえら

## ▶ 日本各地の歴史に焦点を当てる「地域の歩み」

- 特設とコラムの「地域の歩み」で、中央の動きが地域にどのような影響を与え、各地域がどのような歴史を歩んでいったかを記しています。
- 歴史を中央の視点だけでなく、地域の視点からも考えられるようになる教科書です。

### 特設「地域の歩み」

ページ	テーマ(全4か所)
p.233	長崎 企業城下町の形成
p.333	帰国した満洲移民と地域開拓
p.339	アメリカ軍政下の沖縄の暮らし
p.349	エネルギー革命と炭鉱の町

### POINT

終戦後に引き揚げてきた満蒙開拓移民が、苦難のなかで戦後日本の地域開拓を進めていったことがわかります。

### コラム「地域の歩み」(全20か所)

▼ p.242 「青森のりんご栽培」

#### 地域の歩み 青森のりんご栽培

新政府は、土族授産と殖産興業のため果樹生産を奨励し、1871(明治4)年にアメリカからりんごの苗木を導入した。青森県は、1875年に内務省からりんごの苗木を配布され、県庁構内で栽培を始めた。失業していた元弘前藩士が栽培の担い手となり、大規模栽培のための団体を結成し、品種改良を進めた。その結果、青森りんごは昭和初期には全国生産の7割を占めるまでになった。

▼ p.333



↑1 満洲の移民村でスケッチをする小学生たち(1937年) ↑2 蒜山地区を訪問する昭和天皇と香淳皇后(1967年)

#### 地域の歩み 帰国した満洲移民と地域開拓

● 満蒙開拓移民と中国からの引き揚げ  
1929(大正4)年に起こった世界恐慌の影響で農村は大きな経済的打撃を受けた。農村救済が大きな政治問題となるなか、満洲事変が起こると満洲移民構想が浮上してきた。関東軍もまたソ連との戦争に備えて日本人移民を大量に入植させ、戦時に軍事拠点となる移民村をソ連国境付近に配置することを考えていた。それによって、1932年の満洲国の建国直後から敗戦までの14年間に、日本から満洲国・内モンゴルに約27万人の人々が満蒙開拓移民として移住した。

第二次世界大戦末期の1945年8月9日、ソ連が満洲に侵攻を開始すると、国境付近に点在していたうえに、多くの成年男子が召集されていた開拓団は、悲惨な逃避行を余儀なくされた。ソ連軍との戦闘や地元民による襲撃、集団自決、病死などで約8万人が亡くなった。生き残った開拓民の多くは1947年までに日本本土へ引き揚げたが、約1万人が残留孤児や残留婦人として現地にとどまることになり、中国残留日本人問題を生むことになった。

● 帰国と戦後の地域開拓  
日本の故郷へ引き揚げた後も開拓民の苦難は続いた。もともと財産や土地を処分して満洲にわたった者も多く、開拓民の生活再建は容易ではなかった。そのため、日本政府は引き揚げ者の受け皿として国内各地での開拓を国営事業として推進した。これを

受けて、引き揚げてきた開拓移民は、今度は日本国内での地域開拓に取り組むことになった。しかし、多くの開拓地では経営が軌道に乗るまでに時間がかかるため、離職する者も多く、全国的に見ると多くの開拓は失敗に終わった。

その一方、開拓団のさまざまな努力によって経営が軌道に乗った地域もある。例えば、岡山県真庭市の蒜山地区は、戦前は陸軍演習場であったが、戦後の緊急開拓事業によって切り開かれた。入植者の多くが農業の未経験者で、そのうえ、厳しい気象条件から開墾作業は容易ではなかったが、やがてだいが好評となった。1957年にはジャージー牛による酪農経営が始まり、全国有数のジャージー牛の産地となった。1982年からは生乳を使った加工品の製造にも力を入れており、現在でも牛乳・乳製品とだいが蒜山の特産品となっている。開拓移民は国策に翻弄されながらも、日本各地での戦後開拓にさまざまな足跡を残した。



↑3 現在の蒜山高原(左)と↑4 特産品のジャージー牛乳(右)

# れる教科書

## ▶ 日本史の通説をとらえ直す「歴史再考!」

- コラム「歴史再考」では、単元で学んだ内容の再検討を促し、学習内容の理解を深めるとともに思考力も養えます。(全12か所)
- 記述や資料をもとに日本史の通説をとらえ直すことで、歴史を多面的・多角的に考えるとどういふことが、体験的に学ぶことができる教科書です。

#### 歴史再考! 国風文化は日本風文化なのか

国風文化が花開いた11世紀、同時代の北宋の人が、日本の三跡風の書を見て「まるで唐人のようだ」と鑑定しているように、当時の日本は、「尚古の国」(「古代=唐」が保存されているという国)と北宋の人々からは認識されていた。他方、かな文字が誕生し、漢文では表現できない人々の心情を細やかに表せるようになった。かな文字の発展を背景に、これまで天皇や貴族の私的な場でのたしなみであった和歌は、勅撰和歌集が編まれるなど、貴族社会に欠かせないものとなっていった。日本は遣唐使の派遣中止以降、中国の王朝とは平安時代を通して公式な国交を結ばなかった。一方で中国商人による民間の交易は盛んに行われていた。

考えよう 「国風文化は日本風文化」という説明に補足を加えたとしたら、どのように補足するか、あなたの考えを説明しよう。

史料 北宋の知識人からみた日本の書  
日本の草書、唐人の如し、二王の筆に学ぶなり。(伝 董明親王「海外書」をみた北宋人の批評 董其昌「戲鴻堂帖」)  
(日本語訳)  
この日本の草書は、まるで唐人の作品のようだ。王羲之とその子の作品に学んでいる。  
①王羲之、唐の太宗(たいそう)の支持を得た書家。「書聖」とよばれる。

▲ p.68 「国風文化は日本風文化なのか」

### POINT 1

「日本独自の文化が発達した」と理解される国風文化について、それがどの程度「日本風」といえるのか、資料などをもとに検討します。これにより、国風文化の背景や特色について、さらに理解が深まります。

### POINT 2

四民平等や文明開化などから「世の中が良くなった」という印象を受ける明治維新について、当時を生きる人々の人生は本当に「良くなった」のか、資料などをもとに検討します。これにより、明治維新による社会の変化について、さらに理解が深まります。

▼ p.243 「明治維新後、人々の人生はより良くなったのか」

#### 歴史再考! 明治維新後、人々の人生はより良くなったのか

明治維新によって、四民平等の世となり、人々は身分制から解放された。江戸時代にも立身出世を目指す傾向はあったが、生まれや家柄の制約があった。維新後、中村正直が訳した『西国立志編』で論じられた自助や、福沢諭吉の「学問のすゝめ」で説かれた学問による身分・財産の向上が時代の気運となった。他方、それは厳しい競争社会を生み出すものでもあった。明治の終わりに、夏目漱石は「開化が進めば進むほど競争が益劇しくなって生活はいよいよ困難になる」と述べている(『現代日本の開化』)。明治維新は努力や勉強へと人々が追い立てられる社会を生み出すものでもあり、競争に敗れた人にとっては過酷な側面もあった。

考えよう 明治維新後、人々の人生はより良いものになったのだろうか。あなたの考えを述べてみよう。

史料 「西国立志編」(中村正直訳)  
天八自ら助ケル者ヲ助ケ、ト云ヘル諺ハ、確然経験シタル格言ナリ。…自ら助ケト云コトハ、能ク自立シテ、他人ノ力ニ倚ザルコトナリ。…自ら助ケル人民多クシテ、ソノ邦国、必ズ元氣充美シ、精神強盛ナルコトナリ。他人ヨリ助ケラテ成就セルモノハ、ソノ後、必ズ衰フルコトアリ。…  
①西国立志編…イギリス人ハミコリスマイルズの著作「天八自らの助けを助ける」の邦訳書。②天八自ら助ケル者ヲ助ケ…西洋の「A Cypri Heaven helps those who help themselves」

# 日本史を多面的・多角的にとらえられる教科書

## ▶ 文化と社会背景を結びつける「文化から見る当時の社会」

- 文化に関する項では、本文と関連づけて多様な文化資料を掲載しています。また本文では、文化を生んだ社会背景を丁寧に記述しています。
- 文化史用語の暗記で終わらせず、社会と関連づけて理解できる教科書です。

### 3部1章4項「桃山文化」の一部

文化から見る当時の社会

#### 戦国大名らを中心につちかわれた桃山文化

戦国時代末期から、安土桃山時代にかけて、天下人や戦国大名らを中心とした文化が生まれた。彼らが築いた城郭や、それを飾った屏風から、文化がつちかわれた社会背景を考えてみよう。



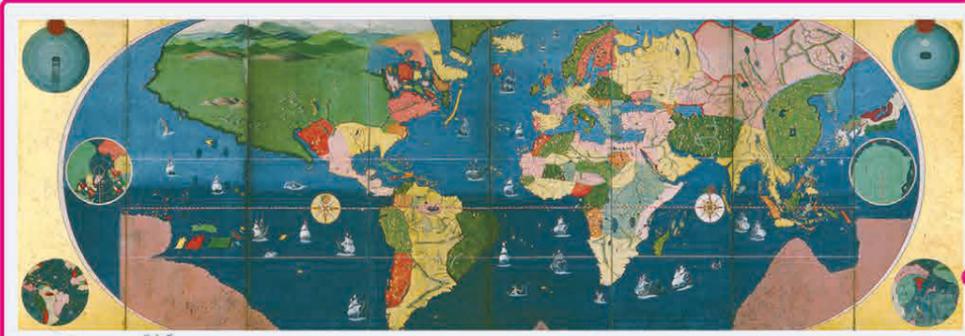
↑1 唐獅子図屏風 狩野永徳の障壁画で、金箔の上に絵を描く金碧濃彩の手法がとられた。縦約224cm、横452cmと巨大な画面に、中国の神獣獅子を描いている。城郭内部は、こうした障壁画でいろどられた。失われた安土城の障壁画も永徳が関わったとされる。(図)石見 皇居三の丸尚蔵館蔵

→2 二条城二の丸御殿大広間 二条城内の、200畳ほどの大広間である。従来、主君と臣下の対面は少人数で行われていたが、大広間の設置により、上段に座する一人の主君に対して、多くの臣下がひれ伏す儀礼が可能となった。(元)鎌倉二条城事務所提供



↑3 姫路城(白鷲城) 平山城で、簡単に攻められないよう城全体が複雑な構造になっている。天守の高さは31.5m、その下の石垣の高さは14.5mで、崩れないよう、日本独自に発展した数学(和算)で計算されている。

史記 ルイスフロイスが記した織田信長と安土城  
彼は都から十四里の近江の国の安土山という山に、その時代までに日本で建てられたものなかでもっとも壮麗だといわれる七層の城と宮殿を建築した。運び上げるのに四、五千人を必要とする石も数個あり、我々ヨーロッパの石造建築を眺めるとほとんどなら異なるほど堅固に、そして豪華にできている。宮殿や広間の豪華さ、窓の美しさ、内部で光彩を放っている金、赤く漆で塗られた木柱とすべて塗金した他の柱の数々、人々が確言するところによれば、彼は、もっとも富み、かつ強大な人物であった。多量に所有する金銀以外に、インドの高価な品、シナの珍品、朝鮮および遠隔の地方からの美しい品々は、ほとんどすべて彼の掌中に集ったからである。茶の湯の道具は、日本では、我々の許に於ける宝石のような価格、価値、貴重さを有し、すべての美しく珍しい品々、彼はそれらすべてを集まる中心点であった。(糸田毅一「川崎桃山時代」フロイス日本史と現代史)



↑4 世界図屏風 ヨーロッパの地図を参考に日本人が作成したとされる。16世紀末以降、世界地図の屏風は、海外への関心の下、多数作成された。(図)158.7cm×477.7cm 神戸市立博物館蔵

疑問 天下人や戦国大名が、金や海外由来の題材で城郭を飾ったのはなぜだろうか。

#### 4項 桃山文化

項の課題 全国統一が進むなかでの文化には、どのような特色があるのだろうか。

#### 豪華絢爛な桃山文化

天下人や大名による経済発展・技術革新や国内外の流通の活発化により、壮大で豪華な文化が築かれた。民衆にも、新しい生活様式や芸能が広く浸透した。

5 戦国乱世を生き抜いた天下人や戦国大名は、戦争で支配領域を拡大するとともに、領国経営や鉱山開発により人・資源・富を集積し、みずから権力を象徴する城郭・寺社の造営や城下町の整備を進めた。相次ぐ戦争や土木事業を通じ、めざましい技術と文化の革新が起こった。

また豪商たちは、これまでの中国やアジア諸国に加えて、新たに来航したヨーロッパ人との貿易によって巨万の富を得た。彼らがもたらした文物や新しい技術や地球的世界観は、国際的な文化を生み出した。

さらに、村が自立し、京都・堺・博多などの都市が発展し、楽市楽座による都市や周辺地域の間の特産物の流通、印刷技術の革新などにより、国内の物流・情報のネットワークが形成された。これにより新しい生活様式や芸能が、地方の民衆にまで広く浸透した。

こうした天下人や大名と豪商らを中心とする新しい時代の気風を反映した豪壮で国際的な文化を桃山文化という。

#### 城郭建築と障壁画

城郭建築は、権力の象徴として巨大化し、軍事拠点だけでなく政治・経済の中心となった。城郭内部をいろどる障壁画が発展し、さまざまな作品が生み出された。

城郭建築は、山上の山城から、平野部の平山城・平城へ変化していった。平山城・平城は、鉄砲や大砲など軍事技術の革新に対応する軍事拠点であるとともに、領主や家臣が居住し、領国の政治・経済の拠点となった。城郭は権力の象徴として巨大化し、天守とよばれた高樓建築を中心に、幾重もの濠や巨大な石垣が築かれた。内部の大広間は、主君と多くの臣下が一堂に会し主従関係を示す空間であった。書院造の豪華な御殿



↑5 地球儀 ヨーロッパからもたらされ、インド・中国・日本の三国で構成されていたそれまでの日本の世界観が拡大した。(天理大学附属天理図書館蔵)

建築	
【城郭】姫路城(白鷲城)	白鷲城
二条城二の丸御殿	二の丸御殿
【寺院】西本願寺書院・唐門	西本願寺書院・唐門
醍醐寺三寶院表書院・庭園	醍醐寺三寶院表書院・庭園
【茶室】妙西庵茶室(待庵)	妙西庵茶室(待庵)
【遺構】伝聚楽茶室遺構・大徳寺唐門	伝聚楽茶室遺構・大徳寺唐門
西本願寺飛雲閣	西本願寺飛雲閣
伏見城遺構: 徳久天須麻神社本殿	伏見城遺構: 徳久天須麻神社本殿
絵画	
【洛中洛外図屏風】唐獅子図屏風	洛中洛外図屏風 唐獅子図屏風
【繪図屏風】(狩野永徳)	繪図屏風 (狩野永徳)
【松園図】[牡丹図](狩野山楽)	松園図 [牡丹図] (狩野山楽)
【職人図屏風】(狩野吉信)	職人図屏風 (狩野吉信)
【南風屏風】(狩野内膳)	南風屏風 (狩野内膳)
【松林図屏風】(長谷川等伯)	松林図屏風 (長谷川等伯)
【山水図屏風】(海北友松)	山水図屏風 (海北友松)

↑6 桃山文化

◀ p.150-151

#### POINT 1

各時代の文化を象徴する作品や資料を多数掲載しており、本文と資料を結びつけながら文化史の学習を進められます。本ページでは、本文で記述されている桃山文化の豪華さと国際性を、さまざまな作品や資料からとらえられます。

#### POINT 2

本文では、それぞれの文化が生まれた社会背景を丁寧に記述しています。本ページでは、戦国時代の相次ぐ戦争や土木事業による技術・文化の革新、および豪商の海外貿易、国内の物流・情報ネットワークの整備を背景として、桃山文化が形成されたことがわかります。

入試に直結! 文化史が育まれた背景を、作品や資料を参照しながら理解することで、知識が定着しやすくなります。

特色①  
特色②  
特色③  
特色④  
特色⑤  
入試対応  
QRコンテンツ  
関連教材  
本文執筆

# 紙面の三段構成と多数の資料で分

## りやすく使いやすい教科書

# 文・側注の三段構成

## りやすく使いやすい教科書

入試に直結!

要約文は、歴史の流れの総復習を行う際に活用できます。また、論述問題や小論文での要約の参考にもなります。側注は、複雑な概念の理解や詳細な知識の習得に役立ちます。

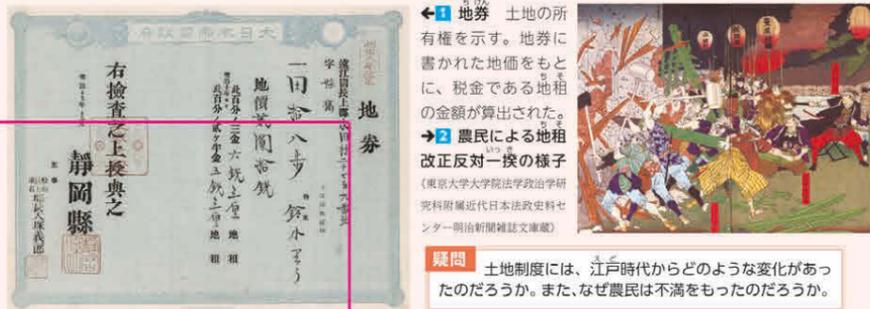
- 本文ページは、要約文、因果関係が分かりやすい本文、側注の三段構成としています。
- ページ下部には、「中学校との関連」「歴史総合との関連」というコーナーを設けており、既習の事項を確認した上で日本史探究の学習を進められます。

p.230

### 3章 近現代社会の展開と変容

#### 1節 新政府による国づくり

節の問い なぜ明治新政府は、急速に近代化政策を進めていったのだろうか。



←1 地券 土地の所有権を示す。地券に書かれた地価をもとに、税金である地租の金額が算出された。

→2 農民による地租改正反対一揆の様子 (東京大学大学院法政学研究所附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫蔵)

疑問 土地制度には、江戸時代からどのような変化があったのだろうか。また、なぜ農民は不満をもったのだろうか。

#### 1項 制度の刷新と殖産興業

項の課題 新政府は、どのような国家を目指して改革を進めたのだろうか。

##### 新しい国のしくみづくり

政府は、学制・徴兵令・地租改正を行って、教育・軍事・財政の土台をつくらうとした。しかし、その政策は急進的で、社会の動揺と反発を招いた。

四民平等・廃藩置県で中央集権体制を整えた新政府は、その制度を成り立たせるため、新たなしくみづくりを行った。新政府は、欧米にならうとして、国民を単位とする国民国家の建設を目標とし、人々が日本国民という意識をもち、国の担い手となるために、さまざまな政策を行った。まず急がれたのが、人材を育成するための教育、強兵政策のための軍事制度、財政を賄うための税制の整備であった。

教育については、1871(明治4)年に文部省が創設され、翌72年にはフランスを参考とした学制が公布された。これによって政府は、全国への小学校設立と、6歳以上の男女すべての就学を唱え、国民皆学を達成することを目指した。また、学制は大学に至るまでの諸学校の制度も定めており、近代的な学校教育の制度づくりが始められた。

軍事制度については、武士が軍事を担う近世のしくみに代わって、国民から広く兵士を徴兵する国民皆兵の近代的軍隊がつけられた。1872年に徴兵令が公布され、翌73年1月に徴兵令が公布され、士族・平民の区別なく満20歳に達した男子は、全国各地に設けられた軍団組織である鎮台において、3年間の兵役に服するものとされた。また警察制度も導入され、首都東京には74年に警視庁が設置された。

Key Word 国民国家 QR  
「国家」とは一定の領土と住民をもち、領域内で主権を有した団体であるが、近代国家ではその住民を「国民」とよぶ。「国民」とは言葉や歴史といった文化的要素を同一にした人間集団であるが、近代のヨーロッパでは同質の国民によって成り立つ国家が理想とされた。その影響は明治期の日本に及び、「単一民族」としての日本人像が浸透した。

1 小学校の普及 小学校の建設費用は地域負担であったため、建設の時期は地域によって異なった。

2 鎮台 明治初期に設けられた陸軍の最大編制単位。薩摩・長州・土佐の藩士で編制された御親兵(→p.222)もとにつくられ、徐々に徴兵軍隊に入れ替わった。六鎮台が設置されていたが、1888年に師団へ再編された(→p.250)。

230 歴史総合との関連 学制、徴兵令、地租改正、富国強兵

### 1 要約文

小見出しごとに、本文の要点をまとめています。

### 2 本文

日本と世界のつながりや因果関係、さまざまな視点を重視して歴史を記述しています。(→本資料p.6-9、12-16)

### 3 側注

本文の詳細や補足を記述しています。

#### 中学校/歴史総合との関連

1部・2部・3部は中学校で、4部は歴史総合で学習した用語を確認できるようにしています。

### 要約文

- 小見出しごとに、本文の要点を2行にまとめた要約文を設置しています。予習や復習を行いやすい構成です。
- 要約文をつなげて読むことで、歴史の大まかな流れをつかめます。

#### ▼4部3章1節1~4項の要約文(p.230~243)

##### 新しい国のしくみづくり

政府は、学制・徴兵令・地租改正を行って、教育・軍事・財政の土台をつくらうとした。しかし、その政策は急進的で、社会の動揺と反発を招いた。

##### 経済・産業・流通の整備

政府は、経済発展のためのさまざまな政策も行った。統一した貨幣制度の導入や、工部省と内務省による殖産興業政策、鉄道の建設や通信制度の整備が挙げられる。

##### 文明開化

明治維新は西洋をモデルとする政治や経済の改革をもたらしたが、社会の風俗や人々の考え方も大きく変わり、文明開化とよばれる生活・文化の変容が生じた。

##### 近代思想の広まり

明治になって、西洋近代思想も盛んに受容された。福沢諭吉や中江兆民などの著作が読まれて読まれた。西洋思想の概念の翻訳には、漢語の教養が大きく貢献した。

##### 近代学問の導入

欧米の学問を導入するために、外国人教師が大量に雇用され、留学生も多く派遣された。西洋の学問を教える学校は、慶應義塾や同志社など民間でもつくられた。

##### 宗教の変革

新政府では当初、神道国教化を進める動きもあり、神仏習合を改めようとしたが、成功しなかった。キリスト教も当初は引き続き禁止されたが、じきに解禁された。

##### 列強の世界進出と結びつく世界

いち早く産業革命を成し遂げた西洋列強は、世界中に進出して影響力を強めた。それは同時に、世界の一体化もたらし、世界をつなぐ航路が誕生した。

##### 東アジア諸国との関係と政治の変容

新政府は、清とは1871年に日清修好条約を結んだが、朝鮮との国交は難航した。政府は、過激な征韓論を抑えたが、江華島事件に果して、日朝修好条約を結んだ。

##### 琉球の日本編入と沖縄県の設置

新政府は、日清両属であった琉球王国を琉球藩とし、後に沖縄県とすることで日本に編入した。その後も琉球の帰属については、清との対立がみられた。

##### 北方の国境確定とアイヌ民族

日本とロシアの国境が画定するが、それは樺太や千島のアイヌに犠牲を強いた。また北海道でも、アイヌは伝統的な土地所有を否定され、苦境に立たされた。

##### 士族の不満と自由民権運動の始まり

武士としての特権を奪われ、廃藩で職も失った士族のなかには、新政府に不満を抱く者が多かった。彼ら不平士族に支えられて、自由民権運動が始まった。

##### 士族の武力反乱とその終わり

自由民権運動の誕生と同時に、士族反乱も盛んとなった。しかし、いずれも政府によって鎮圧され、西郷隆盛をかつて起こった西南戦争も、政府軍が勝利した。

#### POINT

つなげて読むことで、新政府によるしくみづくりから西南戦争までの流れを端的につかめます。

### 側注

- 用語の詳しい解説は、側注にまとめています。本文の流れをさえぎらずに、詳細な知識を習得できる構成です。
- 特に重要な概念用語などは、「Key Word」を設けて丁寧に解説しています。

#### Key Word 交換制度 QR

紙幣を、一定の価値をもつ金や銀などの資産(正貨)と交換できるようにした制度のこと。正貨を金とした制度を「金本位制」、銀とした制度を「銀本位制」という。これにより、紙幣は貴金属の信用を背景に、通貨としての信頼性を保った(通貨信用制度)。19世紀後半、欧米諸国の多くは金本位制を採用していた。

1 国立銀行条例 不換紙幣の整理などのため、新政府は銀行券の発行を認められた国立銀行設立を促した。国立というが、株式会社であり民間銀行だった。

2 新政府の不換紙幣 政府は戊辰戦争中から不換紙幣(太政官札・民部省札)を発行していた。

3 内務省 殖産興業推進のため、大久保利通によって設立された中央官庁。後に内政全般を管掌したが、戦後に解体された。

4 内国勸業博覧会 殖産興業政策の一環として開かれた博覧会。産業の知識交換や技術革新を促すため、5回開かれた。

5 電信 電報のように、文言・画像などを電気的符号や信号に変換し送受信する技術。

#### POINT 1

本ページ以降も頻出する交換制度のしくみが、Key Wordを読むことで理解できます。また、側注を読むことで、各用語への理解が深まります。



p.232

#### POINT 2

QRコンテンツにも用語解説を収録しています。教科書執筆者による解説で、用語をより深く理解することができます(→本資料p.37)。

# 紙面の三段構成と多数の資料で分

▶ 広い紙面を生かした多数の掲載資料と、資料読解に取り組める工夫

# かりやすく使いやすい教科書

▶ 歴史事象を空間的にとらえられる帝国書院ならではの地図

- 本文の周囲には、本文と関連させてさまざまな種類の資料を掲載しています。本文とあわせて資料やコラムを見ることで、日本史の理解をより深めることができます。
- 各項の導入部には、資料とともに資料への「疑問」を設置し、学習課題につなげています。資料読解の訓練になるとともに、疑問をもつことで各項の学習に入りやすくなります。

- 見やすく分かりやすい地図や、新たな視点での地図を、多数掲載しています。
- 歴史の舞台となった地域の、位置やつながりをとらえられます。

## 各項冒頭の導入資料と、資料への「疑問」

◀ p.254 導入

**POINT 1**

日本と清が対立する背景や、考え方の違いについて、資料を読み取ってイメージした上で日清戦争の学習に臨めます。

【史料】李鴻章と森有礼の会談（一八七六年）  
 「朝鮮が清の属国か否か、について」  
 李：朝鮮の国王は、清の皇帝の命により立っている。これをもち、清の属国としている。  
 森：その関係は、清と朝鮮との国交における礼式であり、朝鮮独立の議論とは無関係である。  
 李：朝鮮が実際に清の属国であることは、旧来世間でもよく知られていることである。  
 【西洋文明の導入について】  
 李：近年の日本の改革はすばらしいが、衣服の西洋化はよくない。衣服とは人に祖先を記憶させるものである。子孫は保つべきである。  
 森：旧来の服装は、楽に過ぎずにはないが、多くの仕事をするには適さない。千年前、我が祖先は貴国の服装に優れた点をおいて、採用し、他国の良い点を模倣するのは日本の美風である。  
 李：貴国独立の精神を欧州にゆだねたことに、恥じ入ることはないか。  
 森：むしろ誇りに思ふ。他からの強制でなく、みづから望んで行ったのだ。  
 李：清では決してそのような変更は行わないだろう。ただ武器・鉄道・電信などは必須の品で、西洋の最も優れた点なので、採用するしかない。  
 （『李鴻章全集 第一巻（上）』）

◀ 清の高官 李鴻章と日本の公使 森有礼との間で、朝鮮問題や西洋文明の導入について意見が交わされた。

↑1 李鴻章 (1823~1901)    ↑2 森有礼 (1847~89)

**疑問** 両者の考えは、どのように異なっているだろうか。

## 本文の理解を助けるさまざまな資料

◀ p.75 4

**POINT 2**

二つの模式図から、モザイク状であったそれまでの荘園と領域型荘園との違いをとらえられます。

▶ p.171 2

**POINT 3**

絵巻物から近世の町の様子をとらえられます。本資料をはじめ一部の資料は、QRコンテンツ「探Q資料」で拡大閲覧できます（→本資料p.35）。

▶ p.305 4

**POINT 4**

グラフから、1930年~40年代において軍事費が増大していく様子をとらえられます。本資料をはじめ一部の資料には、資料活用を促すアイコンを設置しています。

↑4 11世紀後半ごろの荘園（上）と領域型荘園（下）

↑2 町の風景 江戸の日本橋周辺の様子。店舗、露天売、移動販売（棒手振）など多様な商人が描かれている。QRコンテンツ

↑4 軍事費の増大 資料活用 軍事費の増加に事件や戦争などがどのように関係するか考えよう。

## ▼ 巻頭1-巻頭2「東アジアと日本の交流の歴史」内 地図



**POINT 1**

巻頭に、大陸からみた東アジアの地図を掲載し、古代から近世までの交易路や、重要な地名・史跡を示しています。日本列島が日本海を、琉球諸島が東シナ海を囲むように連なっていることがわかり、日本と東アジア諸国との間で、海を通じた交流が活発であったことが読み取れます。

## ▼ p.193 1 「19世紀ごろの北方交易」



**POINT 2**

p.193では、ロシアや欧米諸国が北太平洋のラッコの毛皮を求め、それがロシアの日本航路につながることを記しています。併載した本図で、日本北方の交易ルートや産物がよくわかります。

# 探究活動に丁寧に取り組める教科書

## ▶ 部全体で探究活動に取り組める構造

- 部全体を、学習指導要領で示された「時代を通観する問いの表現(本書では「探究する問いの表現」と言い換えています)」や「時代の特色についての仮説の表現」などの探究活動に取り組める構造としています。
- 1章や3章に設置した、学習を深めるための問いや課題も、丁寧に構造化しています。部での学びがすべてつながり、根拠をもって時代の特色を探究できます(▶本資料p.31)。

### 時代の扉 …中学校や歴史総合での学習を振り返る ▶本資料p.27で解説

- 部で扱う時代について、これまでに学習してきた内容を端的に振り返ります。

### 1章 …時代の転換期を学び、「探究する問い」を表現する【本文ページ】

- 時代の転換期を、「1章の問い」や、項ごとに置かれた問いに取り組みながら学びます。
- 1章のまとめで、学習内容を元に、時代の特色についての「探究する問い」を表現します。

### 2章 …資料から考察し、「時代の特色についての仮説」を表現する ▶本資料p.28-29で解説

- 三つの「探究TRY」から一つを選んで資料読解や考察に取り組み、1章で表現した「探究する問い」も踏まえて「時代の特色についての仮説」を表現します。

### 3章 …自身の「探究する問い」と「仮説」を踏まえ、節・項の構造化された問いに取り組みながら歴史の展開を学ぶ【本文ページ】

- 各時代の展開について、1章で表現した「探究する問い」と2章で表現した「仮説」を踏まえ、「節の問い」「項の課題」に取り組みながら学びます。
- 構造化された問いで、歴史的な諸事象について根拠をもって表現する力が身につきます。

### まとめと展望 …学習を振り返り、時代の特色をまとめる ▶本資料p.30で解説

- 部全体での学習内容を踏まえて、2章で表現した「仮説」を振り返り、1章で表現した「探究する問い」に答える形で時代の特色をまとめます。

1部~4部3章までの学習を踏まえ、4部4章「現代の日本の課題の探究」(p.370~377)に取り組む

## ▶ 中学校の歴史や歴史総合を踏まえて部の学習に臨める「時代の扉」

- 1~3部の冒頭には、時代の学習の導入として、「時代の扉」を設置しています。近現代を扱う4部では、部の冒頭に加え、「戦後」と「冷戦後」にも設置しています。
- 導入文で各時代の概要を、広範囲の地図で日本と諸外国の関係を大観できます。
- 中学校や歴史総合での学習内容が元となるイラスト・写真や年表を掲載しています。既習事項を振り返った上で、各時代の学習に臨めます。

▼ p.6-7

### 1部 先史・古代の日本と東アジア

東アジアの世界の動きから先史・古代の学習を概観しよう

ユーラシア大陸の東に位置する日本列島は、中国や朝鮮半島と共通する自然環境の下で、これらの地域と交流しながら独自の社会や文化を形成してきた。

先史時代では、中国で始まった稲作や雄鶏の栽培が、朝鮮半島を介して日本列島に伝わり、日本列島の大部分は狩猟採集生活から農耕社会へと移行していった。そして日本列島各地で地域集団が形成され、互いに交流しながら共通の文化的な基盤を形成していった。

古代は、地域集団を主導したヤマト王権が、対外的には「倭」として中国や朝鮮半島と交流し、その交流を利用して日本列島に支配を広げていった。中国で隋や唐の巨大帝国が成立すると律令国家として古代国家の体制を整えていき、対外的にも「日本」と称するようになった。そして大陸との交流を消化して、独自の社会や文化を形成していった。

1部1章では、日本列島が狩猟採集社会から農耕社会へと移行し、その社会を基盤にして成立する古代国家の芽生えを学習する。この過程を通して、自身が先史・古代の時代の特色をどのように考えるかの「探究する問い」を表現する。

1部2章では、考古資料、中国や日本の文献資料、絵画などの画像資料といった先史・古代の時代の特色を表す具体的な事例を通して、先史・古代の自身の仮説を表現する。

1部3章では、日本の政権が、中国にならないうちから古代国家の体制を整えていき、独自の社会や文化を形成していく過程を通して、古代の社会や文化の特色を考察していく。

東アジアの世界的動き

北狄、南狄、西戎、東夷

後漢、魏、蜀、呉、晋、宋、齊、梁、陳、隋、唐

新羅、百濟、高麗、新羅

倭

#### 時代の特色を考えてみよう

① 各時代像イラストは、どのような様子を描いているだろうか。

② 各時代像イラストから時代の特色を表している箇所を3つ挙げて、その理由を説明しよう。

東アジアの世界的動き	東アジアとの交流	日本の主な出来事
100 前漢、朝鮮半島に楽浪郡などを設置	● 倭人、百済国に分立し、その一部は楽浪郡と交渉	● 倭人、百済国に分立し、その一部は楽浪郡と交渉
25 後漢がおこる	57 倭の武烈王、後漢に朝貢し倭印を授かる	● 倭の武烈王、後漢に朝貢し倭印を授かる
166 大率王安(倭王)の没	107 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
204 倭、朝鮮半島に邪馬台国を設立	239 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
220 三国(魏・呉・蜀)時代が始まる	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
280 百済(百済)が中国を統一	372 百済王、七支刀を倭に贈る	● 百済王、七支刀を倭に贈る
313 蜀(蜀)が滅亡	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
439 北朝(北朝)が統一(南北朝時代)	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
562 加那利、新羅に滅ぼされる	600 第1回遣唐使の派遣	● 第1回遣唐使の派遣
589 隋、中国を統一	630 第1回遣唐使の派遣	● 第1回遣唐使の派遣
618 唐、建国	663 白村江の戦い	● 白村江の戦い
660 百済、滅亡	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
676 新羅、朝鮮半島を統一	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
698 渤海がおこる	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
● 唐文化の伝来	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
● 新羅、仏教文化の伝来	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
907 唐の滅亡	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
936 高麗、朝鮮半島を統一	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
● 日本列島の統一	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
● 1019 刀伊の入寇	● 倭王(倭王)の没	● 倭王(倭王)の没
537 高麗国造(高麗)の没	552 蘇我氏と物部氏の対立	● 蘇我氏と物部氏の対立
592 蘇我氏が即位	603 第12回遣唐使の派遣	● 第12回遣唐使の派遣
603 第12回遣唐使の派遣	604 第13回遣唐使の派遣	● 第13回遣唐使の派遣
604 第13回遣唐使の派遣	701 大嘗会(大嘗会)の行	● 大嘗会(大嘗会)の行
701 大嘗会(大嘗会)の行	741 天智天皇の即位	● 天智天皇の即位
741 天智天皇の即位	743 天武天皇の即位	● 天武天皇の即位
743 天武天皇の即位	794 平安京(平安京)の遷都	● 平安京(平安京)の遷都
794 平安京(平安京)の遷都	939 天慶の乱	● 天慶の乱
939 天慶の乱	1017 藤原純通、摂政になる	● 藤原純通、摂政になる

**POINT 1**

東アジアを広く見渡せる地図により、日本と周辺諸国との位置関係を大きくとらえることができます。

**POINT 2**

1~3部では、弊社が発刊する、中学校歴史的分野の教科書で使用しているイラストを掲載しています。既習事項を手がかりに、時代をイメージできる導入となっています。

本イラストの全体像は、QRコンテンツ「時代像イラスト」で確認できます(▶本資料p.35)。

**POINT 3**

年表右の「日本の主な出来事」は、中学校の歴史や歴史総合で学習した内容を中心に掲載しています。既習事項を簡潔に整理することができます。

特色①  
特色②  
特色③  
特色④  
特色⑤  
入試対応  
QRコンテンツ  
関連教材  
本文執筆

資料を通して思考力・判断力・表現力を養う

探究TRY

入試に直結!

共通テストをはじめ、近年大学入試で必須となっている、資料読解の力が身につきます。また、仮説を構築し表現する活動を通して、総合型選抜に必要な論理的思考力もつちかえます。

- 2章は、テーマごとにまとめられた複数の資料を考察し、時代の特色についての仮説を表現する「探究TRY」としています。仮説を表現することが、3章の学習の動機づけにつながり、時代の特色をとらえやすくなります。
仮説の表現だけでなく、資料読解能力や、資料を組み合わせる能力、自身の考えを文章で表現する能力も身につきます。

POINT 1

生徒が疑問を抱ける導入文・導入資料から、テーマを考察するための「Question」へと自然につながるため、興味をもって活動に取り組めます。

POINT 2

「Question」を考察する材料として、2~3点の小テーマを設置しています。小テーマは複数の資料から構成されており、資料を組み合わせる力が身につきます。

POINT 3

「Question」の考察と、時代の特色についての仮説の表現は、話し合いも含めた3段階で構成しています。スモールステップで無理なく仮説を表現することができます。

探究TRY③ 日記や文学から当時の人々の考え方や暮らしを考える

1章では、考古資料の考察に基づいて叙述されている一方、3章以降で取り上げる時代の歴史は、文献資料に基づいて叙述されている。このページでは、日記や文学作品から当時の人々の暮らしやそのもとになる考え方を考察し、そこから先史・古代の特色についてあなたの仮説を表現してみよう。



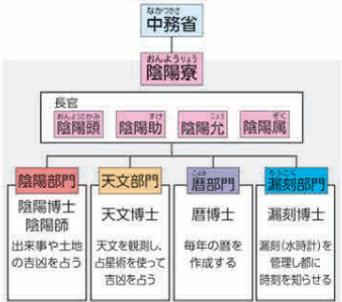
↑1 「不動利益縁起絵巻」(14世紀) (部分) 東京国立博物館蔵

左の資料は14世紀につくられた絵巻物である。平安時代の高名な陰陽師である安倍晴明(921~1005)が僧侶の病気の行く末を占い、治らないと分かると、依頼者からの懇願により「身代わりと生命の挿げ替えの術」を行う物語の場面である。このように陰陽師は、呪術や占術を用いて、厄を祓ったり吉凶を判断したりした。なぜ平安時代に陰陽師が活躍することになったのか。当時の人々の考えや暮らしに関する資料から平安時代の社会を考察し、仮説を立ててみよう。

Question なぜ平安時代に陰陽師が活躍することになったのだろうか。

A 陰陽寮の役割と陰陽道の成立

陰陽寮とは、律令制で整備された中務省の役所の一つで、事務方の頭・助・允・属の官人と、専門的技術を担う陰陽・天文・暦・漏刻の四部門で構成された。陰陽寮は、国家の統治のために中国の先端技術を用いることが職務であった。平安時代になると、中国の陰陽五行説や占術・暦の知識、さらに密教や道教などの中国思想や知識を下敷きに、日本において占いと呪術を主とする陰陽道が成立した。陰陽寮の官人だけではなく陰陽道を扱う人々を広く陰陽師とよぶようになった。陰陽師と当時の生活との関わりを考察しよう。



↑2 「御堂関白日記」(11世紀) 藤原道長は、具注暦の行間に日記を書いている。具注暦とは、吉凶判断のためのさまざまな注が記載されている暦のことである。貴族は、これをもとに物忌や方違を行っていた。具注暦は陰陽寮でつくられていた。資料は長保2(1000)年正月の日記。(陽明文庫蔵)

↑2 中務省陰陽寮の組織図
1005年1月
物忌の日 方違の日
1日 内裏へ出仕 7日 自宅にこもる
2日 内裏で中宮影字・皇太子に拝賀し、寛政を受ける 8日 自宅にこもる
3日 内裏へ出仕 9日 内裏へ出仕
4日 馬を献上される 10日 内裏へ出仕
5日 天皇のもとへ参上 11日 自宅にこもる
6日 叙位の会議のため出仕 12日 自宅にこもる
13日 来客がある
14日 内裏へ出仕後、宿泊(1泊)

↑3 藤原道長の1か月の行動 具注の表記だけでなくさまざまな出来事から吉凶を判断し、物忌や方違が盛んに行われるようになった。

B 当時の貴族の日記にみる安倍晴明

当時の貴族の日記には安倍晴明が貴族の日常に深く関わっていたことが記されている。これらの資料から、陰陽師の役割を考察しよう。

疑問 なぜ貴族は陰陽師に日時吉凶の占いや病気の癒いを頼んだのだろうか。

「権記」藤原行成の日記
長徳三(九七)年六月十七日、一条天皇の御せによつて、(安倍)晴明と(貴茂)光采に東三条院(藤原院)のせとに行幸する日時を助申せし二人が言つたことは、今日二十日甲寅、時は巳の刻、穴字東門を出発されるのがよろしいことなり。

「小右記」藤原実資の日記
永延二(九八)年七月四日戊子、今朝、小児が(病のため)藤原義理の邸宅より小野宮(祖父実務邸)に帰つた。今夜、(安倍)晴明朝臣が口のため鬼氣祭を行った。

「御堂関白日記」藤原道長の日記
寛弘元(一〇〇四)年九月二十五日丙午、多武峯寺が、去る二十日に藤原藤平公の御葬が鳴動したといふ怪異を申しました。(安倍)晴明朝臣を召して占せし。懐かき年に当たつては公卿の許に、その占方を送つた。...

C 平安京の暮らし

推定14万人以上が暮らす平安京。物忌や方違を行う貴族の生活。これらの資料から陰陽師が活躍した平安京の暮らしを考察しよう。

→3 平安京桑坊復元図 方位が明確な都市構造は、藤原や方違が人々に浸透するのに大いに影響した。また、全国から人が集まり、下水処理が不完全な平安京では疫病も多く発生した。



「御堂関白日記」藤原道長の日記
長和二(一〇三三)年四月一日癸亥、夜に入つて(源)雅通の四興の家に至つて宿した。これは、法興院の仏堂を建立するに際して、明日から大將軍が遊行の方角にあるからである。その占めを避けたいので、(安倍)晴明朝臣に占めさせた。...

疑問 平安京は陰陽道の浸透にどのように影響したのだろうか。

仮説を表現しよう

STEP 1 ① A・B・Cの資料の疑問について、あなたの考えを書き出してみよう。
② 周りの人と、それぞれの考えを発表し合い、共通する考えや異なる考えを共有しよう。

STEP 2 なぜ平安時代に陰陽師が活躍することになったのだろうか。STEP 1や資料A・B・Cから読み取った内容を踏まえて、あなたの考えを書いてみよう。

平安時代に陰陽師が活躍することになった理由は、

STEP 3 1章の学習や「探究TRY」の考察を通して、「先史・古代の特色」はどのようなものか、あなたの仮説を表現しよう。

あなたの仮説
先史・古代の特色は、
なぜなら、
からである。

→「探究する問い」を通して、3章の学習を進めるなかで、あなたが表現した仮説について考えていこう。

POINT 4

時代ごとに、それぞれ異なる視点から歴史を探究できる三つのテーマを設定しました。特に近世や近現代では、ジェンダーや環境問題など、現代社会にもつながるテーマを設定しています。

部全体の学習を振り返り、時代の特色をまとめる「まとめと展望」

- 各部の末尾には、各時代の総まとめとして、「まとめと展望」ページを設置しています。
- 部全体での学習を振り返った後、みずから表現してきた「探究する問い」と「仮説」を踏まえ、時代の特色をまとめます。段階を分け、それぞれの活動を明確化しているので、無理なくまとめに取り組める構成となっています。

▼ p.70-71

**POINT 1**

1章・2章での活動や、3章で取り組んできた問いを、1ページで振り返ることができます。まとめの活動だけでなく、部の学習中の見取り図としても活用いただけます。

**POINT 2**

三段階の作業に取り組み、時代の特色を表現します。学習した歴史の流れだけでなく、これまでに表現してきた「探究する問い」「仮説」も踏まえ、部全体の学習活動の総まとめとなります。

**POINT 3**

日本史探究の最終課題である、「現代の日本の課題の探究」(p.370~377)に向かうコーナーを設けています。最終的な目標を見据えて、学習を進めることができます。

本資料p.26~30で紹介した、本書の「部全体で探究活動に取り組める構造」の具体例  
→1部(先史・古代)の例

特色①  
特色②  
特色③  
特色④  
特色⑤  
入試対応  
QRコンテンツ  
関連教材  
本文執筆

- 実際の日本史探究の大学入試問題と、解答に必要な要素が本書にどのように掲載されているかをまとめました。
- 冊子『新詳日本史探究』で解く 2025年度 日本史探究 大学入試問題にて、本問以外の入試問題も例示しながら、本書の入試対応を詳しく解説しております。右のQRコードからご覧ください。



## ▼2025年度東京大学 大問1 (一部省略)

次の(1)~(5)の文章を読んで、下記の設問に答えよ。

- (1) 法隆寺金堂釈迦三尊像は、623年に渡来系氏族出身の鞍作鳥(止利)によって作られ、北魏様式を伝える。蘇我馬子による飛鳥寺の造営においては、百済王が技術者を派遣したほか、鞍作鳥が仏像を作った。
  - (2) 670年の火災ののち再建された法隆寺金堂の壁画は、インド的な要素もみられ初唐の絵画様式を伝える。この時期には、朝鮮半島の新羅を通じて唐文化の受容が行われ、白村江の戦い以後の亡命百済人の役割も大きかったと考えられる。
  - (3) 702年、30年以上の空白において大宝の遣唐使が派遣された。責任者の粟田真人【あわたのまひと】は、皇帝の則天武后に新たな国号「日本」を承認してもらった。唐に対して20年に一度朝貢するという約束を結んだのもこの時だったと考えられる。
  - (4) この時唐に渡り、三論宗を学び718年に帰国した道慈は、多くの僧尼が正式な戒を授かっておらず、「今の日本の仏教のあり方は、唐とは異なる」と批判した。717年の遣唐使で渡唐した玄昉は、經典五千巻余りを持ち帰り、法相宗を伝えた。
  - (5) 754年、鑑真が苦難を乗り越え遣唐使帰国船で来日した。鑑真は、唐の戒律学の継承者であり、日本に戒律を伝えてほしいと招かれ、東大寺大仏の前で聖武太上天皇以下に授戒し、多くの僧侶に正式な戒を授けた。鑑真は、經典や戒律をもたらしたほか、仏像製作などの工人も伴ったらしい。
- 設問 7世紀から8世紀にかけて、中国文化の受容のあり方や担い手はどのように変化し、その背景には何があったか。5行以内で述べよ。

## 解答のポイント

この問題で重要なのは、7世紀から8世紀にかけて、中国文化の受容が、百済・新羅を媒介とする間接的な受容から、唐からの直接的な受容へと段階的に変わった点である。本問ではその変化を、国際情勢と国内体制の変化と結びつけて整理できているかが問われている。

まず7世紀前半には、朝鮮半島との交流を背景に、渡来人を通じて、中国(南北朝)文化が間接的に受容された。遣隋使のやりとりによる直接受容は限定的であった。

▶『新詳日本史探究』では、観勒・曇徴の活動や蘇我氏らの仏教導入を取り上げつつ、資料も揭示しながら、朝鮮から間接的に中国文化が日本に流入していることを示している。

次に7世紀後半には、白村江の戦い後の国際環境の変化を背景に、新羅や、百済や高句麗の亡命者を媒介として初唐文化が受容された。この時期には、依然として文化受容の中心経路は間接的なものであった。

▶『新詳日本史探究』では、地図も活用して国際環境の変化を明示しつつ、新羅を経由して初唐の中国文化が受容されていることを示している。また、百済・高句麗から亡命してきた人々も文化浸透に寄与したことも示している。

さらに8世紀に入ると、律令国家の整備に伴う遣唐使の再開を背景に、中国文化は唐から直接受容されるようになった。日本からの留学生や留学僧も主な担い手となり、仏教の教義や制度そのものが問い直された。

▶『新詳日本史探究』では、遣唐使再開の背景・目的を明示するとともに、特設ページで留学生・留学僧による文化吸収の姿を丁寧に示している。鑑真ら渡来僧や、帰国僧により、仏教制度の再編が進んだことも示している。

## 『新詳日本史探究』における7世紀前半の記述・資料

607年、倭は小野妹子を使者として二度目の遣隋使を派遣した。

また、このころ、百済の僧観勒が暦法を伝え、儒教に精通していた高句麗の僧曇徴が紙・墨・絵の具の製法を伝えるなど、朝鮮半島からも引き続き文化が流入していた。

▲ p.33

渡来人と関係が深く、早くから仏教を取り入れていた蘇我氏や、仏教を厚く信仰する厩戸王が政権を運営することにより、多くの王宮がつけられた飛鳥の地に仏教文化が栄えた。この時期の文化を飛鳥文化という。

寺院には仏像が安置された。仏像は信仰対象としてだけでなく、人々の願いを受けて制作された。中国北朝の北魏様式の影響がみられる法隆寺金堂釈迦三尊像は、厩戸王の病氣快復や死後の安らぎを願って、仏師の鞍作鳥が制作したといわれている。

▲ p.35



↑4 朝鮮の半跏思惟像 半跏思惟とは、片足を組み(半跏)、ほおづえをつき深く考える(思惟)姿のこと。(韓国国立中央博物館)

↑7 法隆寺金堂釈迦三尊像(像高84.2cm)

疑問 なぜ朝鮮半島と同じ姿の仏像があるのだろうか。

▶ p.35

## 『新詳日本史探究』における7世紀後半の記述・資料



7世紀半ばの東アジア 6世紀後半に朝鮮半島で新羅が強勢となると、高句麗は倭と国交を結び、百済も倭との関係を強めた。7世紀に入り、唐が建国された後、高句麗・百済と新羅の対立は深まり、新羅は唐と結んで対抗した。一方、倭は高句麗・百済との関係を重視して、新羅・唐と対立した。この時期の倭による東北遠征には、北方を経由して高句麗と連絡しようとする目的があったとする説もある。

◀ p.37

676年に新羅が唐の勢力を追いやり朝鮮半島を統一し、東アジア情勢も落ち着きを取り戻した文武・持統朝には、新羅との関係も修復された。そのため、インドの影響が色濃く反映されている初唐の文化や、高句麗・百済を含む朝鮮半島の文化が、新羅を経由して伝来した。この7世紀後半から8世紀初頭の文化を白鳳文化という。

◀ p.43

→また、p.42-43には、白鳳文化の資料を多数掲載しています。

▲ p.38

世界の百済・高句麗からの遺臣

百済・高句麗の滅亡により、王族・貴族を含む大量の人々が朝鮮半島から日本に渡来してきた。その多くが、東国に配置された。武蔵国高麗郡は、高句麗系渡来人が居住するために8世紀に建郡された。また、武蔵国新羅郡の建郡の際には、一般の人のほか、新羅僧も移住している。東国への渡来系文化や仏教の浸透に、彼らが果たした役割は大きい(→p.45)。

## 『新詳日本史探究』における8世紀の記述

701(大宝元)年に大宝律令を施行し、律令国家としての体制が整った翌年、外交だけでなく文化を直接摂取して日本に取り入れるため、約30年ぶりに粟田真人らが遣唐使として派遣された。このとき、唐は則天武后の時代で一時的に周と国号を変えていた。真人らはとまどいながらも都の長安へ入り、新しい情報・知識を得て帰国した。この知見を基に新たな京の造営が始まり、710(和銅3)年に元明天皇は平城京へ遷都した。これ以降から平安京遷都までを奈良時代とよぶ。

◀ p.44

●遣唐使派遣と留学生・留学僧  
日本から派遣された遣唐使は、「唐への朝貢の見返りとして与えられる回賜品をすべて書籍に替えて持ち帰った」(『旧唐書』倭国日本伝)と唐の人々に評価されているように、長安に集まる最先端の文化を積極的に貪欲に吸収しようと努めた。

▶ p.45 特設「世界の中の日本 国際都市長安と日本の留学生・留学僧」

→また、p.50-51には、天平文化の資料を多数掲載しています。

日本の仏教は中国や朝鮮半島の仏教政策を手本にしながら、政治と密接な関係を持ち発展してきた。奈良時代に主に参照されたのは、中国仏教であった。聖武天皇が鎮護国家の思想に基づき命じた国分寺建立や大仏造立は、唐の則天武后期の政策の影響があった。また、遣唐使を派遣して請来した鑑真は、日本に戒律を伝えて唐招提寺を創建し、一緒に渡来した弟子らと共に後進の育成にあたった。彼ら渡来僧や唐から帰国した僧らを中心にして、奈良の大寺院では、鑑真が伝えた律宗を含む六宗(南都六宗)の教学研究が寺院の枠を越えて盛んに行われた。

▲ p.49



教科書の流れに沿いながら、選択問題や論述問題など、より深い理解を促す発展的な演習問題を収録しています。問題は河合塾講師と共同で作成したもので、授業内容の確認や入試前の実践的な演習として活用できます。また、丁寧な解説により、自学自習用にも役立ちます。

▼4部3章5節 問5【史料・年表問題】

Q. 次の資料X～Zと年表中の空欄a～fについて、組合せとして正しいものを、後の①～⑧のうちから一つ選べ。

資料

- X 政府ハ戦時ニ際シ国家総動員上必要アルトキハ、勅令ノ定ムル所ニ依リ、帝国臣民ヲ徴用シテ総動員業務ニ従事セシムルコトヲ得。
- Y 日本国政府ハ支那及印度支那ヨリ一切ノ陸、海、空軍兵力及警察力ヲ撤収スヘシ。
- Z 吾等ハ日本国政府力直ニ全日本国軍隊ノ無条件降伏ヲ宣言シ(中略)右以外ノ日本国ノ選択ハ迅速目完全ナル壊滅アルノミトス。

年表

1937年	日中戦争勃発	
		a
1939年	第二次世界大戦勃発	
		b
1940年	北部仏印進駐	
		c
1941年	太平洋戦争勃発	
		d
1942年	ミッドウェー海戦	
		e
1944年	サイパン島陥落	
		f
1945年	ポツダム宣言受諾	

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
X	a	a	a	a	b	b	b	b
Y	c	c	d	d	c	c	d	d
Z	e	f	e	f	e	f	e	f

解答

②

解説

正しい組合せは②。Xは、1938年の国家総動員法である。国家総動員法は、日中戦争の長期化が決定的となるなか、1938年に制定された。同法を根拠として、議会の承認を経ずに価格統制令や国民徴用令などの勅令が制定された。したがってaが該当する。Yは1941年のハルノートである。日米関係改善のための日米交渉が進められるなか、アメリカは満洲事変以前の状態にまで日本軍を撤退するように求めるハルノートを提示した。この結果、日本は対米開戦を決定することとなった。したがってcが該当する。Zは、1945年のポツダム宣言である。日本の戦局が悪化するなか、ベルリン郊外のポツダムで会議が行われ、日本に無条件降伏を求めるポツダム宣言が発表された。日本政府はこれを「黙殺」したが、その後、広島・長崎に原子爆弾が投下され、またソ連が対日参戦すると、ポツダム宣言を受諾した。したがってfが該当する。

▼1部3章2節 問3【論述問題】

Q. 10世紀における政府の課税・徴税方法の転換について、下記の語句を用いて150字以内で説明せよ(句読点も字数に含めること)。

【田堵 官物 受領 名】

解答例

農民の浮浪・逃亡により調・庸などの税収入が減少したため、政府は課税対象を人から土地へと転換し、任国に赴く国司の最上席者である受領に、地方行政の権限を与えたとともに徴税を請け負わせた。受領は国内の耕地を名とよばれる徴税単位に編成し、有力農民である田堵に耕作と徴税を請け負わせ、官物や臨時雑役を徴収した。(150字)

解説

本問では、10世紀における政府の課税・徴税方法の転換について問うた。解答には、背景となる9世紀の状況にも簡単に触れながら、以下の点を盛り込みたい。

- ① 農民の浮浪・逃亡により調・庸などの税収入が減少
- ② 政府は課税対象を人から土地へと転換
- ③ 任国に赴く国司の最上席者である受領に、地方行政の権限を与え、徴税を請け負わせる
- ④ 受領は国内の耕地を名とよばれる徴税単位に編成
- ⑤ 有力農民である田堵に耕作と徴税を請け負わせ、官物や臨時雑役を徴収

▼3部1章 問5【図像問題】

Q. 桃山文化に関連する図X・Yと、それに関して述べた文a～dとの組み合わせとして正しいものを、後の①～④のうちから一つ選べ。



- a Xは金箔などの上に濃厚な色彩で描いた濃絵の障壁画で、狩野永徳が描いた。
- b Xは日本の風物を素材とした大和絵で、土佐光起が描いた。
- c Yは三味線の伴奏で語られた人形浄瑠璃の様子を描く。

	①	②	③	④
X	a	a	b	b
Y	c	d	c	d

解答

②

解説

正しい組み合わせは②。aは正しい。Xは狩野永徳の描いた『唐獅子図屏風』で、濃絵の障壁画である。桃山文化期には、天下人や大名たちの築いた城や寺院の襖・天井や屏風に濃厚な色彩で描かれた濃絵の障壁画がつけられた。bは誤っている。土佐光起は、元禄文化期に活躍した画家で、朝廷画家となり大和絵の土佐派を復興した。cは誤っている。Yは『阿国歌舞伎図屏風』に描かれたかぶき踊りの場面で、三味線や人形などは描かれていない。dは正しい。出雲阿国が京都で始めたかぶき踊りの場が描かれている。桃山文化期には、琉球から伝来した三味線の伴奏で語られた人形浄瑠璃や、出雲阿国のかぶき踊りが民衆の間で人気を集めた。

歴史用語を答える一問一答を収録しています。出題範囲は、部・章・節・項を自由に組み合わせることで選ぶことができます。間違えた問題だけをピックアップし、繰り返し取り組むことができます。

本文執筆者の解説文で、教科書に掲載している重要用語などの定義や意味を確認できます。検索機能もあり、調べたい用語をすぐに確認できます。また、弊社教科書『新詳世界史探究』の用語解説も確認できます。

**アイヌ民族**

現在の北海道とその周辺に、日本やロシアの領土となる以前から居住していた先住民族。独自の言語であるアイヌ語を使用し、先行する縄文文化などを土台に、13世紀頃に今日「伝統的」とされる文化の基本的な形態が成立した。狩猟・漁労・採集のほか、雑穀農耕や、毛皮や海産物などの活発な交易を行ったが、江戸時代には松前藩や幕府の支配下での搾取が強まった。明治以降には、厳しい差別や同化政策によって伝統的な生業や文化の継承が困難となり、アイヌの血を引くことを隠す人も増えたが、20世紀末以降には、先住民族としての権利や尊厳の獲得、文化の振興の動きも進みつつある。

# 指導資料 Webサポートコンテンツ付

※内容は一部変更になる可能性があります

次の①指導資料と②指導書Webサポートがセットになった商品です。  
定価：2026年9月中旬公開予定

## ① 指導資料

- 教科書の項ごとに構成しています。
- 前半には、板書例などを示した「指導内容の整理」と、発問例などを示した「指導上のポイント」を掲載しています。
- 後半には、各種問いの解答例や、写真・図版・本文の解説を掲載しています。

### ▼教科書p.160-164に対応した指導資料のページ

教 p.160~164

3部 近世の日本と世界	単元のねらい
3章 近世社会の展開と変容	項の課題 江戸幕府による全国統治の体制には、どのような特徴があるだろうか。
<b>1項 幕藩体制の形成</b>	①江戸幕府の全国統治の体制の特徴を理解している。 ②江戸幕府の全国統治の体制の特徴について考察し、自分の言葉で表現している。

指導内容の整理	指導上のポイント
<p><b>■幕府による大名統制</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1616年、徳川家康が死去</li> <li>⇒ 2代将軍徳川秀忠の課題→法令を運用し「徳川の平和」を保つ</li> <li>・大名などに領地宛行状を発給→将軍との上下関係を示す</li> <li>大名「石高1万以上の領地(藩)をもつ」</li> <li>親藩・譜代・外様に分かれる</li> <li>・江戸に藩邸を構え、人質として妻子を住まわせる</li> <li>・参勤交代→3代将軍徳川家光が武家諸法度(寛永令)で、義務化</li> <li>・軍役、手伝普請(城郭・治水など)、京都上洛・日光社参への随行</li> <li>⇒将軍の権威を示す</li> <li>・幕藩体制→将軍と諸大名らが土地や人々の大半を支配する体制</li> </ul> <p><b>■幕府の組織</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・旗本・御家人→将軍に日常的に仕える家臣(幕臣)</li> <li>・国家の統治は、幕臣たちが将軍を輔佐する形で行う</li> <li>・老中→複数の老中がなり、政策決定や諸大名との調整や指示を行う</li> <li>・若年寄→老中を補佐、旗本・御家人を管理</li> <li>・大老→必要に応じて設置し、重要な政策事項の決定に関与</li> <li>・三奉行(町奉行、寺社奉行、勘定奉行)→幕府政治の中心</li> <li>・郡代・代官→全国の幕府直轄領(幕領)に着任</li> <li>・遠国奉行→農村以外の重要な直轄地に派遣</li> <li>・京都所司代・大坂城代→政治経済上重要な上方の管理</li> <li>・大目付→大名を監視 目付→幕政全般や旗本を監督</li> <li>・幕府の財源→17世紀前半は年貢と鉱山が中心</li> <li>⇒年貢→幕府直轄領(400万石) 鉱山→石見銀山や佐渡金山など</li> <li>⇒商業や貿易も統制して、取入を得たり、物価統制を行ったりした</li> </ul> <p><b>■藩の政治</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・将軍の命によって転封、加増・減封、改易が行われた</li> <li>・大名→藩内で独自に法や制度を定めて統治</li> <li>・家臣(藩士)→地方知行制と俸禄制時代とともに増加</li> <li>※大藩では、家臣が小大名並みの領地を与えられることもあった</li> <li>・17世紀は、大名と家臣の関係も不安定⇒お家騒動(内紛)も発生</li> <li>⇒幕府は大名を支持⇒大名は、幕府の権威を背景に家臣団を統制</li> <li>・財源→年貢のほか、漁業・林業・鉱山・商業など地域によって多様</li> <li>⇒参勤交代や藩邸の維持、要人の交際など必要経費が多い</li> <li>⇒手伝普請や将軍への随行などは自費⇒財政は苦しい</li> <li>・廻船対象→武家諸法度違反、百姓一揆発生、家臣統制の失敗</li> <li>・藩邸→江戸・大坂・京都など ※江戸藩邸には妻子や家臣が住んだ</li> <li>・戦争のない時代、大名と将軍は相互依存の関係</li> <li>⇒一國一城令や武家諸法度によって支配体制が安定化した</li> </ul>	<p><b>【中学校・歴史総合との関連】</b></p> <p>中学校では、江戸幕府のしくみや大名や朝廷の統制について学習している。</p> <p><b>【発問例①】</b>なぜ法令を運用することが「徳川の平和」を保つことになるのだろうか。</p> <p><b>【ポイント①】</b>戦国の時代からの社会風俗の変化に気づかせる。また、法令による統治のためにこれからの社会に必要なことについての見通しももたせたい。</p> <p><b>【発問例②】</b>武士の家の組織とはどのようなことをさしているのだろうか。</p> <p><b>【ポイント②】</b>幕府の仕組みの有力な幕臣数人が老中となって話し合っていたことについて話してあげて政治を行っているかのようなことを気づかせる。また、徳川家の家臣の下に、さらにそれぞれの家臣団を抱えていることに基づかせる。</p> <p><b>【発問例③】</b>大名と将軍の依存関係とはどのようなことをさしているのだろうか。</p> <p><b>【ポイント③】</b>大名が藩の支配体制を安定させるための工夫について考えさせる。</p>

地が広がるなど、影響力をもった。領地が広がるが、たり、大名同士がうな分布は、幕府集権的な体制を推し進める。幕府(幕府)の距離を、5泊このように参勤交代、薩摩藩のものな財力や権威を示忠告を示すための

元和以後、藩内で武力衝突する事例が稀になり(人吉藩のお下の乱など)、また赤穂浪士の吉良邸討ち入りはあったが、幕末の長州戦争まで、内戦に相当するような大規模な武士集団間の衝突はなくなる。一方で天草・島原一揆で民衆対領主との階級間の武力抗争が現実のものとなった。そのため大名間の紛争抑止を目指していた武家諸法度の改定を行い、非常時には隣接する地域へ、幕府の許可を待たず出兵することを認めるようになっていく。

**◆p.160 8行目「領地宛行状」、p.4~5行目「領地は大名の財産ではなく、あくまで将軍から貸し与えられたもの」**

領地宛行状では、将軍が大名などに対し、領地支配を認めることを示している。3代将軍家光の時までは、大名の代わりに際し、個別に発給されていたが、4代将軍家綱以後は、将軍の代わりごとに一斉に発給された。宛行状では、領地の場所と石高が書かれている。重要なのは、場所と同時に石高で示されていることである。石高制が全国で通用されているので、数字上の石高が同じであれば、大名は異なる土地に移封されても問題なかった。そのため、幕府は譜代大名の転封をよく行った。特に要地は、年齢や能力をみて大名を配置していた。外様大名は歴代の土地を治めることが多かったが、失政すれば転封は行われた。将軍の土地支配の力は大きかった。また大名が世代交代をした時、将軍の許可を得て、さらに領知宛行状を入手する必要があった。大名は世襲を指名することはできたが、幕府の同意なく正式に継承することはできなかった。また、世代交代時、前の当主の意向がなくても、幕府の指示で当主の弟などが分地されて旗本や小さい大名になる場合もあった。

鎌倉時代の本願安堵は、すでに領知となった土地の支配を将軍が承認する性格が大きい。さらに家督も当主の意向が大きく、子供に分割なども適宜行っていた。それゆえに当主の死後、その相続の正統性をめぐって幕府に訴えが出ている。

**◆p.161 6~7行目「徳川家という武士の家の組織が拡大」**

徳川家は地方の一戦国大名から始まっている。そこでは、同族団や譜代の家臣などが中心的な構成員であった。そのため家としての性格が、江戸幕府の政治決定の過程にも残存している。幕府の老中は、江戸時代初期は年寄と呼ばれていたことが多かったように、一族の年寄が知恵をだして意思決定を行ったという名残である。幕府の若年寄はその見習いとして後に設置された。また、血統の継承が幕府体制の根幹であり、徳川家の家族について担当する奥向(大

3章 近世社会の展開と変容 165

3章 近世社会の展開と変容 167

## ② 指導書Webサポート

- 授業をサポートするコンテンツを多数収録しています。
- 帝国書院のウェブ会員ページよりお使いいただけます。

### ▼コンテンツ一覧

- 教科書紙面ビューア
- 授業スライド(.pptx/Googleスライド)
- 授業プリント(生徒用・教師用).docx)
- 見通し・振り返りシート(生徒用・教師用).xlsx/Googleスプレッドシート)
- 特設ページワークシート(.docx)
- 教科書本文(.txt)
- 教科書掲載図版(カラー・モノクロ).jpg)
- 年間指導計画案・評価規準例(.xlsx)
- 問い・まとめ・振り返りの解答例(.txt)
- 評価問題例(テスト例).docx)
- 思考力を測る問題例集.docx)
- 一問一答のデータ.xlsx)
- 動画へのリンク
- 用語解説のデータ.xlsx)
- 白地図集.jpg)
- 参考文献リスト.docx)
- 教科書QRコンテンツへのリンク

## 教科書紙面ビューア

- 教科書紙面を先生方の端末でご覧いただけるビューアです。 ※ダウンロードはできません



## 授業スライド

- 教科書本文ページに準拠したスライドを、PowerPointとGoogleスライドの2形式で収録しています。
- 付せん部分は、スライドショーで順に外れるよう作成しています。

教科書p.160~164

### 1項 幕藩体制の形成

- ・ 3部 近世の日本と世界
- ・ 3章 近世社会の展開と変容
- ・ 1部 幕藩体制の確立

**項の課題**

江戸幕府による全国の統治体制には、どのような特徴があるのだろうか。

**学習のポイント**

- 江戸幕府の全国統治の体制の特徴を理解している。
- 江戸幕府の全国統治の体制の特徴について考察し、自分の言葉で表現している。

**疑問**

幕府が全国を統一するのに、なぜ直轄領が少ないのだろうか。

図① 大名と直轄領の分布 [p.160 第1へ](#)

図② 江戸時代中期の日本列島の石高 [p.160 第1へ](#)

p.160 図① 大名と直轄領の分布

**幕府による大名統制**

**要約文**

江戸幕府は平和な社会を維持するため、大名の活動を制限しつつ、負担を強いた。一方で、大名の藩支配に対して保証を与えた。こうした体制を幕藩体制という。

**幕府による大名統制①**

- ・ 1616年、徳川家康が死去
- ⇒ 2代将軍の課題
- 法令を運用し「徳川の平和」を保つ
- ・ 大名などに領地宛行状を発給
- 将軍との上下関係を示す
- ・ 大名「石高1万以上の領地」をもつ
- 徳川家の三家など
- 戦国時代から徳川に仕える
- 関ヶ原の戦い以降の者

**寛永文化①**

- ・ 寛永文化→17世紀前半に、京都を中心に育まれた。天皇・公家・僧侶・裕福な町衆など上流の階級が担い手の文化
- ・ 絵画→大膽な構図→琳派へ発展
- ・ 唐絵→障壁画→子孫は幕府の絵師へ
- ・ 工芸→赤絵

**1項の振り返り**

学習内容を踏まえ、江戸幕府による全国統治の体制には、どのような特徴があるか考えてみよう。

また、あなたが2章で表現した「近世の特色の仮説」も再確認しよう。

教科書p.160-164に対応した授業スライドの一部



## ② 指導書Webサポート

### 授業プリント

- 授業スライド(➡本資料p.39)の付せん部分を穴埋めにしたプリントをWord形式で収録しています。
- 生徒用と教師用(解答付き)があります。

### ▼教科書p.160-164に対応したプリント(生徒用)の一部

年 組 番/名前

3 年 3 組 1 番	幕府体制の成立	教科書	p.160-164	年	月	日
-------------	---------	-----	-----------	---	---	---

**1 項 幕府体制の形成**

□項の課題  
Q:江戸幕府による全国の統治体制には、どのような特徴があるのだろうか。

<学習のポイント>  
(1) 江戸幕府の全国統治の体制の特徴を理解している。  
(2) 江戸幕府の全国統治の体制の特徴について考察し、自分の言葉で表現している。

●幕府による大名統制  
・1616年、徳川家康が死去。  
→2代目将軍(①)の課題一法令を運用し「徳川の平和」を保つ  
大名などに(②)を免給→将軍との上下関係を示す  
大名 石高1万以上の領地(③)をもつ  
親軍・譜代・外様に分かれる  
・江戸に(④)を構え、人質として妻子を住まわせる  
(⑤)→3代将軍(⑥)が武家諸法(⑦)令で、義務化  
(⑧)、(⑨)(城郭・治水)など、京都上洛・日触社参への随行  
→将軍の権威を示す  
(⑩)→将軍と諸大名が土地や人々の大半を支配する体制

●幕府の組織  
・(⑪)・(⑫)→将軍と諸大名が土地や人々の大半を支配する体制  
・国家の統治は、幕臣たちが将軍を補佐する形で行う  
・(⑬)→複数者が唱り、政策決定や諸大名との調整や支持を行う  
・(⑭)→老中を補佐、根本・御家人を管理  
・(⑮)→必要に応じて設置し、重要な政策事項の決定に関与  
・三奉行(⑯)奉行、(⑰)奉行、(⑱)奉行→幕府政治の中心  
・(⑲)奉行→全国の幕府直轄領(幕領)に責任  
・(⑳)奉行→農村以外の重要な直轄地に派遣  
・(㉑)奉行→政治経済上重要な上方の管理  
・(㉒)大名を監督 目付→幕政全般を根本を監督  
・幕府の財源→17世紀前半は(㉓)と鉱山が中心

### 評価問題例(テスト例)

- 教科書に準拠したテスト例と解答をWord形式で収録しています。
- 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の評価観点も示しています。

### ▼教科書p.298-316に対応した評価問題例の一部

4 部 3 章 5 節 第二次世界大戦と日本

① 満洲事変と欧米列強の態度に際して、以下の問いに答えよ。

問1 戦前外交の進展と並んで、以下に示すものについて、以下のア～ウのうち、日本の領土内で生じた出来事が時期順に正しく示されているもの一つを選べ。(知識・技能)  
ア 大川開明によるアヘン禁煙協定 → 国際連盟が中国を承認 → 日本が中国の領土主権を認め  
イ 国際連盟が中国を承認 → 日本が中国の領土主権を認め → 大川開明によるアヘン禁煙協定  
ウ 日本が中国の領土主権を認め → 大川開明によるアヘン禁煙協定 → 国際連盟が中国を承認

問2 満洲事変に際して以下の問いに答えよ。  
(1) 満洲にも及んだ不況と、中国人・国際連盟による対抗で増した日本人社会の不安に際して、日本政府は打倒軍閥を行って来た。その立場を打破するために「満洲国論」を主張した。道台平島南の陸軍少佐の名称を答えよ。(知識・技能)  
(2) 次のア～エの満洲事変後の出来事、年代順に並べ替えて、記号で答えよ。(知識・技能)  
ア 清室馮氏の皇命であった溥儀を扶植した満洲国が建国された。  
イ 日本が関東軍で南滿洲鉄道の線路を確保し、中露国境に防備を強化した。  
ウ 日本は国際連盟を脱退した。  
エ リットン調査団による報告書が公表された。  
(3) 満洲事変には石橋徳山のように、中国領土の領土を考慮して反対の意見もあったが、多くの日本の大衆は日本の中国進出を支持した。その理由を当時の大衆の経済状況やマスコミの役割の面から説明せよ。(思考力・判断力・表現力)  
(4) 満洲事変における日本の軍事行動は、1922年に締結された中国領土の現状維持を決めた条約に違反するものであった。その条約の名称を以下のア～エより選択記号で答えよ。(知識・技能)  
ア 四国協定 イ 九国協定 ウ ヴェルサイユ条約 エ 北京条約

問3 満洲事変に対して国際的な態度をとる政府に対して、政府・政治家への批判が激しかった。そのなかで1932年には大衆教育者団が有年学校長らに署名される事件が起こったが、この事件を何というか。(知識・技能)

問4 リットン調査団は、日本の軍閥行動をどのように報告したのか。その内容について説明した以下の文中の( A ) ( B ) に入る漢語を答えよ。(知識・技能)

日本の軍事行動は、正当な( A )手段と認めることができない。( B )政府も日本の手段と認められ、その承認は認められない。

問5 満洲事変後の日本の情勢に際して、以下のア～エの説明のうち正しいもの一つを選べ。(知識・技能)  
ア 高橋は清蔵の大規模な公共投資は日本経済の不振原因には効果はなかった。  
イ 既成財閥の主導の下で重化学工業が発展し、新興財閥は満洲・朝鮮との結び付きを強化した。  
ウ 戦時体制の輸出により、イデオロギの貿易が激化になった。  
エ 中国領土と併呑協定を結ぶと、軍事手段による勢力拡大を抑制し、満洲国の形成と植民地政策を推進した。

### 思考力を測る問題例集

- 生徒の思考力を具体的に測ることができる問題例と解答を、単元ごとにWord形式で収録しています。(令和9年4月以降順次公開予定)
- 思考力測定に役立つモニタリングシートも収録しています。

▶ 詳しくは、  
こちらの冊子をご覧ください



## 副教材



### 新詳日本史探究演習ノート

教科書に完全準拠したノートです。基本的な知識が身につく空欄補充ページと、オリジナルの資料読解問題「チャレンジ読解力UP」、河合塾講師と共同作成した「演習問題」などで構成しています。



### 図説 日本史通覧

豊富な情報量と充実の資料を掲載した、大学入試に最適な資料集です。各ページに掲載した資料読解や、日本と世界を見渡す巻頭の時代別地図、巻末の全30ページの入試対策が特徴です。

## 特色一覧

項目	特色
総合的な特色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・因果関係と背景を重視した本文記述により、<b>日本史の大きな流れと政治・社会・経済・文化の変化が理解できる</b>になっている。</li> <li>・日本の歴史と世界の動きのつながりを重視した記述や地図により、<b>日本史を国際環境の変化と結びつけてとらえられる</b>ようになっている。</li> <li>・女性・アイヌ民族・琉球王国など多様な立場や視点に配慮し、<b>日本史を多面的・多角的にとらえられる</b>ようになっている。</li> <li>・要約文・本文・側注の三段構成と豊富な資料・地図、QRコンテンツにより、<b>学習を整理しながら進められる</b>ようになっている。</li> <li>・部全体が構造化されており、学習指導要領で示された<b>探究活動に丁寧に取り組み</b>るようになっている。また、1章・3章の学習内容を深めるための問いも丁寧に構造化されており、<b>部内での学びを活かし根拠をもって時代の特色を探究</b>することができるようになっている。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各部では、<b>1章で時代の転換期を扱い、2章で資料を探究し、3章で通史を学ぶ</b>構成としている。<b>各部での時代の特色が明確</b>になるよう、1章で取り扱う転換期の範囲を工夫しており、「何が変わったのか」ととらえやすく、各時代の特色への理解が深まるようになっている。</li> <li>・本文では<b>因果関係や出来事の背景を丁寧に示し</b>、政権の構造や政策の背景、社会・経済・文化の変化など、日本史の諸事象が理解しやすくなっている。</li> <li>・本文や特設・コラム「<b>世界の中の日本</b>」で、海外からの影響や日本と世界相互の関係を丁寧に記述しており、国際環境の変化のなかで日本史をとらえられるようになっている。</li> <li>・本文や特設・コラム「<b>深める</b>」では、<b>女性・アイヌ民族・琉球王国など、多様な立場や視点からの記述</b>がなされており、多面的・多角的な理解が深められるようになっている。また「<b>深める</b>」では、<b>人権・ジェンダーや環境・防災など現代的なテーマ</b>も扱い、歴史理解を現代の課題へつなげられるようになっている。</li> <li>・コラム「<b>歴史再考!</b>」では、論点の記述や資料を通して<b>日本史の通説のとらえ直し</b>を図り、<b>思考力・判断力・表現力を養</b>えるようになっている。</li> <li>・文化史では「<b>文化から見る当時の社会</b>」コーナーを設け、多数の資料とともに本文で当時の社会背景を示し、文化史と当時の社会を関連づけて理解できるようになっている。</li> <li>・部全体が「<b>探究する問いの表現</b>」や「<b>時代の特色についての仮説の表現</b>」などの<b>探究活動に</b>取り組める構造となっており、学習内容を根拠として時代の特色を探究できるようになっている。</li> </ul>
構成・分量	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要約文・本文・側注の三段構成とし、要約文で要点をおさえ、詳細・発展的事項は側注で補うことで、<b>歴史の大枠から詳細な内容まで整理して学習</b>できるようになっている。</li> <li>・要約文は、<b>小見出しごとに2行程度で要点を示し</b>、予習・復習や通史の流れの把握に活用できるようになっている。</li> <li>・広い紙面を生かして<b>多数の資料を掲載し、資料読解に</b>取り組める工夫が施されている。また、<b>見やすく分かりやすい地図や新しい視点の地図</b>を多数掲載している。</li> <li>・各項目頭に資料への「<b>疑問</b>」を設置するなど、問いをもって学習を進められるようになっている。</li> <li>・各部冒頭の「<b>時代の扉</b>」には、<b>導入文や広範囲の地図、既習事項に結びつくイラスト・写真・年表</b>を設置し、見直しをもって学習に入れるようになっている。</li> <li>・各部末の「<b>まとめと展望</b>」で、「<b>探究する問い</b>」「<b>仮説</b>」を踏まえて時代の特色をまとめられるようになっている。</li> <li>・QRコンテンツとして、<b>ワークシート、資料の拡大閲覧、動画、地図・追加資料、思考ツール・白地図、外部リンク、文章資料</b>と現代語訳などを収録し、教科書紙面を超えた多様な学びに対応できるようになっている。</li> <li>・QRコンテンツとして、河合塾講師と共同で作成した<b>演習問題</b>、出題範囲を自由に選び反復できる<b>一問一答</b>、検索機能付きの<b>用語解説</b>を収録し、授業内外での知識定着と入試対策に活用できるようになっている。</li> </ul>
表記・表現及び使用上の便宜	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領に合わせて、<b>重要事項がもれなく丁寧に解説</b>されている。</li> <li>・ふりがなや<b>重要語句へのゴシック(太字)</b>が効果的にほどこされている。</li> <li>・本文には関連図版・写真の図番号が示されており、<b>資料の活用を促す工夫</b>がなされている。</li> <li>・本文内には関連する事項が扱われている箇所への参照ページが掲載されており、<b>教科書を横断的に活用</b>できるよう工夫がなされている。</li> </ul>
ユニバーサルデザインへの対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文や側注、キャプションなどの文字には、見やすく読み間違いにくい<b>ユニバーサルデザインフォント(UDフォント)</b>が使用され、誤読を防ぐ配慮がなされている。</li> <li>・<b>カラーユニバーサルデザイン</b>を採用し、色覚特性のある学習者にも読み取りやすい表現になっている。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・紙は<b>環境に配慮し</b>、かつ<b>裏写りがしない用紙</b>が使用されている。</li> <li>・使用期間の間、破損することがないように、<b>堅牢なつくり</b>になっている。</li> <li>・指導資料や準拠ノートなど、<b>充実した関連教材</b>が用意されている。</li> </ul>

## 著作関係者

※所属・肩書きは令和8(2026)年3月時点のもの

### 著者

青木 一真 (東京都立国際高等学校指導教諭)  
荒木 裕行 (東京大学史料編纂所准教授)  
井上 正也 (慶應義塾大学教授)  
遠藤 珠紀 (東京大学史料編纂所准教授)  
大橋 康一 (滋賀県立高等学校元教諭)  
加藤 健司 (愛知県立明和高等学校教諭)  
金澤 利明 (東洋大学附属牛久中学校、高等学校校長)  
木村 直樹 (長崎大学教授)  
黒田 智 (早稲田大学教授)  
小宮 京 (青山学院大学教授)  
坂井 博美 (南山大学教授)

瀧井 一博 (国際日本文化研究センター教授)  
寺前 直人 (駒澤大学教授)  
奈良岡 聡智 (京都大学教授)  
福岡 泰規 (福岡県立修猷館高等学校教諭)  
星 瑞希 (北海道教育大学札幌校准教授)  
水口 幹記 (立命館大学教授)  
袁島 栄紀 (北海道大学准教授)  
三原 慎吾 (兵庫県立青雲高等学校校長)  
森 靖夫 (同志社大学教授)  
屋良 健一郎 (名城大学教授)  
株式会社帝國書院

### 編集協力者

相根 玲子 (西宮市立西宮東高等学校教諭)  
井上 渚沙 (神奈川県立大磯高等学校教諭)  
馬木 俊輔 (山陽学園中学校・高等学校教諭)  
大館 一基 (東京都立武蔵丘高等学校主任教諭)  
金谷 露 (兵庫県立御影高等学校教諭)  
細川 貴之 (東京都立武蔵野北高等学校主任教諭)  
正垣 裕介 (大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎教諭)  
松井 秀明 (浜松市立高等学校非常勤講師)  
山内 敏男 (兵庫教育大学教授)

### 編集協力

河合塾グループ 株式会社 K I E S  
宮本 晋平 横内 由紀恵 佐藤 早紀子

特別支援教育に関する監修・校閲者 村山 彩 (筑波大学附属視覚特別支援学校教諭)

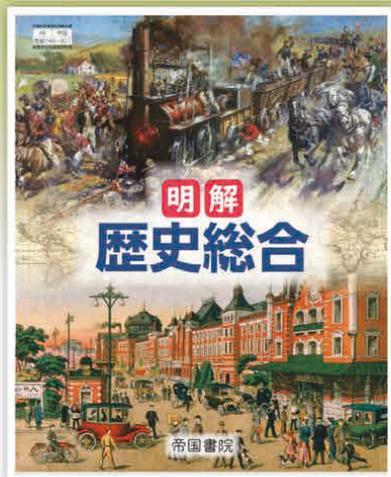
# 本文執筆者紹介

- 教科書本文執筆者を、担当の時代順にご紹介します。
- 各執筆者からの、本教科書発刊に寄せたコメントも掲載しています。

	駒澤大学 教授 <b>寺前 直人</b>	【専門】考古学 【主な執筆箇所】1部前半 【主著】『Q&Aで読む弥生時代入門』吉川弘文館、2024年（共著） 『文明に抗した弥生の人びと』吉川弘文館、2017年	【コメント】私が担当した先史・古代は、日本がまだ存在しない時期の「日本史」です。環境変動に翻弄されながら、技術発展によって人口を増加させていった人類社会のなかで、狩猟採集を長く続けた日本列島のユニークさと、中国文明の周辺として権力が形成されていくプロセスを最新の考古資料から論じました。
	立命館大学 教授 <b>水口 幹記</b>	【専門】日本古代史、東アジア文化史 【主な執筆箇所】1部後半 【主著】『成尋』吉川弘文館、2023年 『前近代東アジアにおける〈術数文化〉』勉誠出版、2020年（編著）	【コメント】本教科書の1部後半を、最新の研究も含め執筆しました。本文もさることながら、特設ページが充実しています。「古代の病気や障がいのある人への施策」では医療と福祉の問題、「暦は誰のためのものか」では日本のみに残る「年号」のもつ政治的意味など、現代社会にも直結できる視点を提示しています。
	早稲田大学 教授 <b>黒田 智</b>	【専門】中近世日本文化史 【主な執筆箇所】2部前半 【主著】『たたかう神仏の図像学:勝軍地蔵と中世社会』吉川弘文館、2021年 『藤原鎌足、時空をかける:変身と再生の日本史』吉川弘文館、2011年	【コメント】天皇や公家、武家、寺社から名もない民衆まで、中世には自力救済を前提とする私的実力があふれていました。なぜ天皇は続き、鎌倉新仏教は誕生したのか？ 生きるための多様な力のせめぎ合いの歴史のなかから、この謎解きに生徒とともにチャレンジしてみてください。
	東京大学史料編纂所 准教授 <b>遠藤 珠紀</b>	【専門】日本中世史 【主な執筆箇所】2部後半 【主著】『北朝天皇研究の最前線』山川出版社、2023年（共編著） 『中世朝廷の官司制度』吉川弘文館、2011年	【コメント】本教科書では、時代の流れを重視して執筆しました。特に暮らし・文化に関わる項や「探究TRY」では、一見無関係に見える政治・社会の動きや自然環境の変化が、人々の生活と相互に密接に結びついていることを読み取ってほしいと思います。
	長崎大学 教授 <b>木村 直樹</b>	【専門】日本近世史 【主な執筆箇所】3部前半 【主著】『〈通訳〉たちの幕末維新』吉川弘文館、2012年 『幕藩制国家と東アジア世界』吉川弘文館、2009年	【コメント】担当した近世前期の社会は、「兵農分離」「石高制」「鎖国」というキーワードで学ばれてきましたが、本書ではそれら基本的なしくみは相互に関係し、人々の暮らし方にまで影響していることを記述しました。また、「日本の中の世界」や「世界の中の日本」についても目配りしています。
	東京大学史料編纂所 准教授 <b>荒木 裕行</b>	【専門】日本近世史 【主な執筆箇所】3部後半～4部冒頭 【主著】『日本近世史を見通す(第三巻)体制危機の到来:近世後期』吉川弘文館、2024年（共編著） 『近世中後期の藩と幕府』東京大学出版会、2017年	【コメント】近世後半は、明治以降の社会を準備する大きな成長期でした。幕府の三大改革や諸藩の改革は、衰退する社会を立て直すとする消極的な試みというだけではありません。むしろ、社会の発展を柔軟に取り込み、新たな政治体制を築こうとした「積極的な政治運営」であったことを、理解してほしいと思います。

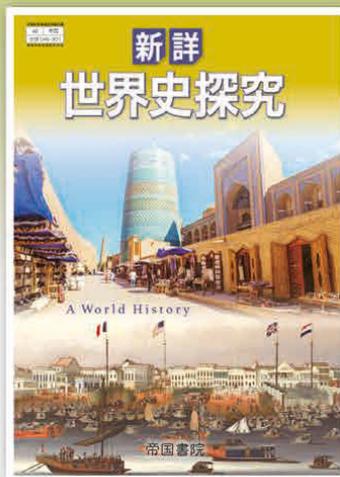
	国際日本文化研究センター 教授 <b>瀧井 一博</b>	【専門】日本近代史 【主な執筆箇所】4部 明治期 【主著】『増補 文明史のなかの明治憲法:この国のかたちと西洋体験』筑摩書房、2023年 『大久保利通-「知」を結ぶ指導者-』新潮社、2022年	【コメント】明治時代を中心に執筆しました。明治維新に大きな関心を示す地域や国々は、今でも世界に多くあります。国家を新たにつくる場合、再建する場合、憲法を新たに制定する場合などに、明治以降の日本の経験は大きな教訓を含んでいます。日本史を通じて、世界とつながる。そんな思いを本書に込めました。
	京都大学 教授 <b>奈良岡 聡智</b>	【専門】日本政治外交史 【主な執筆箇所】4部 大正期～昭和初期 【主著】『日本政治外交史(改訂版)』放送大学教育振興会、2025年（共著） 『対華二十一カ条要求とは何だったのか』名古屋大学出版会、2015年	【コメント】本教科書の大正・昭和初期の部分、世界史とのかかわりや現代とのつながりを特に意識して執筆しました。最新の研究成果を反映させる一方で、写真、図版やコラムも充実させ、楽しみながら勉強できるよう工夫しています。
	同志社大学 教授 <b>森 靖夫</b>	【専門】日本政治史 【主な執筆箇所】4部 昭和中期 【主著】『総力戦とは何だったのか』千倉書房、2025年（編著） 『「国家総動員」の時代-比較の視座から-』名古屋大学出版会、2020年	【コメント】担当した、4部の1930年代から終戦までは、世界の動向や潮流との関連づけを意識した内容となっております。当時も経済や情報はグローバル化しており、日本もその流れに強く影響を受けていました。世界の中の日本を感じ、広い視野から歴史を理解する一助となれば嬉しく思います。
	慶應義塾大学 教授 <b>井上 正也</b>	【専門】日本政治外交史 【主な執筆箇所】4部 昭和後期～現代 【主著】『評伝 福田赳夫』岩波書店、2021年（共著） 『日中国交正常化の政治史』名古屋大学出版会、2010年	【コメント】昭和後期は、今なお新たな史料や事実が発見されており、これからも歴史が塗り替えられる余地が残されています。またこの時期の外交交渉や国内政治の変動は、今日の私たちの社会に大きな影響を与えています。歴史を学ぶことは、現代社会の諸問題を深く理解する手がかりになります。
	青山学院大学 教授 <b>小宮 京</b>	【専門】日本現代史 【主な執筆箇所】4部 昭和後期～現代 【主著】『昭和天皇の敗北-日本国憲法第一条をめぐる闘い』中央公論新社、2025年 『語られざる占領下日本:公職追放から「保守本流」へ』NHK出版、2022年	【コメント】本教科書の昭和後期～現代は、国際環境や国内政治の視点にとどまらず、人々の生活や社会の変化に注目する内容としました。雑誌やテレビ・ネットといったさまざまなメディアの影響、地域間や海外への移動など、現在の日常とつながる視点から、歴史をとらえることができます。
	北海道大学 准教授 <b>蓑島 栄紀</b>	【専門】北方史、アイヌ史 【主な執筆箇所】北方・アイヌ民族関連全般 【主著】『「も」と交易の古代北方史 奈良・平安日本と北海道・アイヌ』勉誠出版、2015年 『アイヌ史を問ひなおす 生態・交流・文化継承』勉誠出版、2011年（編著）	【コメント】古代以来の列島北方史について、その時々国内外の状況との有機的なつながりが見えるよう工夫しました。また、アイヌ民族のあゆみに関して、伝統文化や活発な交易に言及するだけでなく、できる限り現代における「先住民族」としての地位や課題に結びつく記述となるよう努めました。
	名桜大学 教授 <b>屋良 健一郎</b>	【専門】日本中世史・琉球史 【主な執筆箇所】琉球・沖縄関連全般 【主著】『訳注琉球文学』勉誠出版、2022年 『琉球史科学の船出いま、歴史情報の海へ』勉誠出版、2017年（共編著）	【コメント】執筆にあたっては、琉球・沖縄の文化や社会をさまざまな角度からとらえることができるような内容を意識しました。現在の沖縄の個性がどのような歴史的背景のもとで育まれたのかを考えることにつながる記述になっています。
	南山大学 教授 <b>坂井 博美</b>	【専門】日本近現代史・ジェンダー史 【主な執筆箇所】ジェンダー関連全般 【主著】『「愛の争闘」のジェンダー力学-岩野清と泡鳴の同棲・訴訟・思想-』ぺりかん社、2012年	【コメント】本教科書は、女性史・ジェンダー史の成果を豊富に取り入れています。「女性の抑圧から解放へ」といった単線的な見方ではなく、その時期の社会や経済・政治のあり方とジェンダーや家族の形がどのように結びついていたかがわかる内容となっています。

# 帝国書院の 高等学校用 歴史教科書のご案内



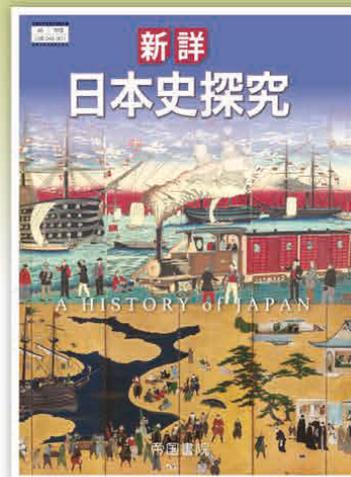
## 明解 歴史総合

現在につながる  
「世界×日本」がわかる教科書



## 新詳世界史探究

世界の構造と変化をとらえ、  
探究する力を育てる教科書



## 新詳日本史探究

歴史の流れと背景をとらえ、  
探究する力を育てる教科書

● 帝国書院の歴史教科書は、以下の4点を大事に編集しています

ポイント

1

### 歴史を多面的・多角的にとらえる力が身につく教科書

本文やコラム、特設では、世界と日本のつながりや、多様な立場からの視点を重視しています。教科書での学習を通して、歴史を多面的・多角的にとらえる力が身につきます。

ポイント

2

### 思考力や資料の読解力が身につく教科書

見通し・振り返りの問いや、複数資料を組み合わせる特設を設置し、さらにアイコンなどで資料活用を促す工夫もしています。日々の学習活動のなかで、思考力や資料の読解力が身につきます。

ポイント

3

### 高校生にとって分かりやすい教科書

因果関係や背景を重視した理解しやすい記述に加え、大きな判型を生かして多くの資料を掲載しています。歴史学習を用語の暗記にとどめず、歴史の流れの理解へと進めることができます。

ポイント

4

### 先生にとって使いやすい教科書

丁寧な指導資料と、プリント・スライド・評価問題例などの充実したWebサポート、用語解説・動画・ワークシートなどの多様なQRコンテンツで、日々の授業をサポートします。

各教科書の詳しい内容については、  
高等学校教科書Webにてご確認ください。

